

水の文化

特集

芸術と水





今、なぜアートが必要なのか



千住 博 (せんじゅ ひろし)

画家／日本藝術院会員

1958年東京生まれ。東京藝術大学卒業。同大学院修了。現代アートのオリンピックと言われるヴェネツィア・ビエンナーレで東洋人初の名誉賞、イサム・ノグチ賞、日米特別功労賞、外務大臣表彰、恩賜賞、日本藝術院賞など受賞。京都造形芸術大学学長を経て、現在京都芸術大学教授。

私は今、画家であると同時に日本藝術院会員という国家公務員でもあります。それで、文化庁との共同事業の一環として、全国の公立の小学校を訪ねて美術の授業をしています。

のべ何百人もの小学生に、和紙を揉んでもらって、何に見えるか考えてみよう、そして見えたものを和紙に色を着けて作品にしてみよう、という私が考案した授業に取り組んでもらっています。

驚くことに、この小学生たちの作り出した作品は、皆ことごとく違うのです。蛸を上から見たところ、とか、海底爆発、ハンバーグや山、水道の蛇口から水が流れていたり、大きな花、アマゾンの巨大魚、怪獣、崖、富士山、海の底、池、川、雲、樹木の幹……と枚挙にいとまがありません。

私は、みんな違うって、なんて素晴らしいことなんだろう、お互いを、君はこんなこと思っていたんだねと尊敬したくなるよね、みんな違うから、自分も違っていいのだね、と話します。

もちろん私は画家や彫刻家がこの授業で育成したいのではありません。小学生たちに、この様な多様性に満ち、創造的で自由な、つまりアートな発想ので

きる社会人になっていって欲しいのです。

しかし中学、高校生くらいになると、受験に役立つこと以外は、興味を持っていても頭がなかなか回らなくなる生徒たちが増えてきます。私が教えた経験上、特に、都会の有名進学校ほど、そんな傾向がありました。

厄介な問いかけや創造的な問題は後に回して、知識だけで回答できる問いにそつなく答え、

大学受験で勝者になり、卒業して、その方法論のまま、できそうな仕事にだけ対処する政治家や役人、企業のトップがつくり出す未来はどんなことになるのでしょうか。今の日本が必ずしも

そうだとは言いませんが、しかし自分にはアートがわからないから、と思い込んでいる会社の役員や政治家があまりに多い。わからないのではなく、かつてはわかっていたのに、その流れを意識的に止めていたのではないのでしょうか。

創造性とは、いわば水です。もう一度、その水の流れの蛇口を回してみてもう一度、

そして、かつて自分が小学生で、夢ばかり見ていたことを思い出し、また、できることなら

この小学生たちの様に和紙を揉んでみたらどうでしょう。それは初めはただのシワ以外には見えません。小学生たちもそうでした。しかし、裏返したり、横を縦にしたりして観察をしているうちに、何かの呼び声が出てきます。ここに羊がいるよ、これは森を上から見たところだよ。小学生のかつての自分自身が、今の自分に語りかけているのです。

水という創造性は、勢いよく流れれば、必ず次のヒントがどこからともなく流れて来るものです。そして固体にも気体にも自由に姿を変えます。

私は、この水の様に柔軟な発想法が社会にとっても大切だと考えています。

水がなくなると命が危険にさらされるように、創造性がなくなると、人の文明はこの先どうなるのでしょうか。

アートは人類の発展にどうしても必要だからこそ、今日まで消えなかったのです。

今こそ大人たちは、かつての自分を呼び戻し、創造性という水をしっかりと補給して、みずみずしい未来をつくって欲しいと感じています。

特集

芸術と水

水面を叩くような強い雨もあれば、木々の葉をしっとり湿らすような雨もある。川を流れる水は、瀬では激しく泡立つが、淵では渦を巻きゆったり流れる——。多彩な表情を見せる水は、さまざまな芸術作品に用いられてきた。水は、表現者たちが心情やメッセージを伝えるのに適しているのだろう。

3年前から始まったコロナ禍において、不幸なことに一部の芸術は不要不急と言われてしまったが、コロナ禍で浮かび上がった今の社会の課題を乗り越えるためには、過去の延長線上ではない新たな思考や哲学が必要となる。

そこで存在感を増しているのが芸術だ。人びとの心を揺さぶり、時には価値観を変えるほどの感動や衝撃をもたらす芸術こそ、私たちにとってなくてはならないものだ。

自らの思いを水に託して作品にした表現者、そして日本古来の芸術を思索する研究者に話を聞いてみよう。そこにはきっと、これからを生きるための手がかりがあるはずだから。

目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく 今、なぜアートが必要なのか 千住博

特集 芸術と水

- 6 想う 浮世絵に見る 人びとと水の景色 藤澤紫
10 詠む 気づきを重ね、丁寧に生きる——俳句と水と我が暮らし 青木亮人
12 綴る 流れゆく川に見る 素晴らしき人生 松浦寿輝
14 描く 水は巡り、生も巡る 海で感じた「命の循環」 大小島真木
19 撮る 一つとして同じものはない「波」を撮りつづけて 梶井照陰
24 映す 水のように穏やかな暮らし——映画『マザーウォーター』 松本佳奈
26 奏でる 「癒やしの音」奏でる 水を用いた祈りの楽器 大橋エリ
28 見つめる 沢水が木々を縫い、池を巡る 静かなる内省の場
32 潜る 泉を浮遊してとらえた光と陰——映画『セノーテ』 小田香
36 文化をつくる 芸術と向き合えば わくわくする日々が訪れる 編集部

Column

- 39 水の余話 遙かなる大海原を越えて 斎藤善之

連載

- 40 食の風土記19 京水菜でいただく「はりはり鍋」
42 みず・ひと・まちの未来モデル6
「水」と「移住者」から捉えた真鶴のコミュニティ 野田岳仁
48 センター活動報告
49 編集後記／ご案内
(敬称略)

葛飾北斎が三つわりの法で描いた
「富嶽三十六景 深川万年橋下」
1831年(天保2)頃
太田記念美術館蔵



インタビュー
藤澤 紫さん
國學院大學文学部
哲学科 教授

Murasaki Fujisawa
東京都生まれ。学習院大学
大学院人文学部研究科哲
学専攻博士後期課程満期
退学。博士(哲学)。国際浮
世絵学会常任理事。2014
年國學院大學文学部特任
教授、2018年より現職。研
究分野は日本美術史、日本
近世文化史、比較芸術学。
『NHK浮世絵EDO-LIFE 浮
世絵で読み解く江戸の暮らし』
(監修)など著書多数。



江戸時代、庶民の間で流行した浮世絵は、ヨーロッパの絵画、特に印象派に大きな影響を与えたといわれる。浮世絵から垣間見る江戸時代の庶民の暮らしと水の景色について、浮世絵研究の第一人者である藤澤紫さんに聞いた。

西洋の画家が惹かれた 暮らし切りとる浮世絵

——そもそも藤澤先生が浮世絵に惹かれたきっかけは何ですか。

絵を描くのが好きで、高校生の頃に西洋絵画の展覧会に行ったところ、彼らが影響を受けた浮世絵に出会いました。とても格好よく感じて、まるで恋に落ちるように「これだ!」と思ったんですね。

その頃、ご縁あって歌舞伎の券を頂戴することが多く、祖母と連れだって観に行っていました。先代の市川團十郎文の襲名披露に、歌舞伎座へセーラー服で駆けつけたのも懐かしい思い出です。歌舞伎や浮世絵を生んだ江戸の空気感を

心地よく感じたんですね。その後進学した大学にいらした恩師が浮世絵研究のスペシャリストで、すっかり研究のおもしろさに魅せられてしまいました。

——西洋の画家は浮世絵のどんなところに影響を受けたのでしょうか。

色彩と構図と主題。この三つの要素があると思います。色彩では、木版画ならではの平面の色の重なり合い、そのパキツとした色合いのおもしろさです。グラデーションはありますが、陰影というより基本的にはフラットな表現ですね。構図に関しては、葛飾北斎や歌川広重は西洋絵画の影響を受けています。18世紀後半以降になると西洋文化の影響もあり、景観や事物をもっとリアルに描きたい欲求

浮世絵に見る 人びとと水の景色

が表に出ます。立体的な遠近感を出す一点透視図法が意識されるほか、西欧の芸術家にも愛された『北斎漫画』にも、天を2、地を1として画面を3分割するテクニク、「三つわりの法」が掲載されています。こうした合理的な西洋由来の構図感覚は西欧の人びとも受け入れやすかったようです。

三つ目の要素である主題が、実はいちばん重要だと考えられます。北斎の「富嶽三十六景」シリーズが当時大ヒットしたのは、色彩や構図のおもしろさだけではなく、「富士講」など民間で流行した信仰を背景に、霊峰富士の像を身近にもつことの安心感、旅への憧れといった需要が大きかったはずで

す。そうした日本人が大事にしている情景やモチーフから、さらにはもう少し踏み込んで、日々の暮らしの細部が垣間見える点などが西洋の画家の心をとらえたのだと思うのです。

例えば、広重の「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」をフィレンゼント・ファン・ゴッホが模写しています。構



歌川広重「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」1857年(安政4) 国立国会図書館蔵
ゴッホがこの絵を模写したのは広く知られている

図のおもしろさや、木版画ならではのシャープな線による雨の描写のみならず、夕立に降られ橋を小走りに渡る人びとの様子に惹かれたのでしょうか。ちなみに、よく見ると、広重の絵では一つの傘に3人が入



歌川広重「東海道五拾三次之内 庄野 白雨」1832-33年(天保3-4) 頃
千葉市美術館蔵

上の「大はしあたけの夕立」と比べると広重は雨を描きわけていることがわかる

っているのに対して、ゴッホは2人しか描いていません。あまりに細かいので、少しズルをしているのかもしれないね。
また、なんとということもない暮らしのひとこまを切りとり、平穏な日常を描いた絵を、海の彼方にある極東の国の人たちが愛おしんだということも西洋の人びとの心に響いたのでしょう。例えば喜多川歌麿の「母子図 たいら遊」にインスピレーションを得たとされる、

母親が子どもをお風呂に入れようとしている「湯浴み」という作品を、印象派の一人に数えられるメアリー・カサットが描いています。

驚きを与える水と 安らぎをもたらす水

——浮世絵のなかで川、海、雨、雪、霧といった水の景色は、どのように描かれているのでしょうか。

やはり北斎と広重がわかりやすいと思います。人を驚かすのが大好きで、稀代のエンターテイナーだった北斎にとって、水は格好のモチーフでした。躍動する水の姿を、あたかも一瞬を切り取る写真家のようにとらえた「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」。北斎は千変万化する水を「おもしろいかたち」として見ていたのではないかと想像します。もしも北斎が現代に生きていたら、筆をとらないで写真を撮ったのではないのでしょうか。ありとあらゆるものの「かたち」を写しとりたい、それによって鑑賞者に驚きを与えたい、という欲望が北斎にはあったのではないかと見ています。

北斎は意匠家、今でいうデザイナーの才もあって、櫛やキセルをデザインした『今様櫛きん雛形』



葛飾北斎 画『今様櫛きん雛形』1841年(天保12) 国立国会図書館蔵
これは工芸細工の図案集で現代でいうデザインブック

葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」1831-33年(天保2-4)頃 千葉市美術館蔵
北斎は70代でこれを描いたが、40代半ばに描いた「賀奈川沖本空之図」に比べると波の表現が大きく進化している

というデザインブックを手がけています。波頭やさざ波、大波など、びっくりするほど魅力的な水の「かたち」を描いた模様が載っているのです。

対して広重が生み出す作品は、驚きよりも安らぎをもたらしてくれます。つまり、こうだったらいいな、と誰もが心のなかで思う景色を見せてくれるのです。例えば「月に雁」には「こむな夜か 又も有るか 月に雁」という俳句が寄せられています。まさに「できすぎ」とも思えるような情景をさらりと描くのが得意です。それこそ、暮らしのなかにある何気ない水辺の表現などはとてもうまい。

暮らしを支える水や、人とともにある水の景色を広重は非常に魅力的に描いています。「名所江戸百景」シリーズ計119図のうち、水景がどれくらい描かれているかを数えたところ、なんと7/8割にものぼりました。この作品は1855年(安政2)の安政の大地震の直後に刊行が始まっています。



1890年(明治23)に描かれた楊洲周延(ようしゅうちかのぶ)「幻燈写心競 温泉」(左)と「幻燈写心競 海水浴」(右) 國學院大學博物館蔵
明治期には温泉地などを夢想した浮世絵も登場

震災の被害は家屋の倒壊に加え、火事でも多くの人が亡くなりました。実は広重の生家は、江戸市中の消防や非常警備を行なう「定火消同心」で、水神様が統べる「寿ぎの水」を意図的に描いたのではないかと考えられます。逆にこの作品には、暮らしのなかにある火は、意図的に描かれていないようにも見えます。

青と水に満ちた江戸の世界

——浮世絵における水の表現と、西洋絵画での水の表現には違いがあるのでしょうか。

描き方によって多種多様になるところが水のおもしろさで、一概に比較するのは難しいかもしれません。ただ、「ジャパンブルー」という言葉がいつしか定着したように、日本の陶磁器や浮世絵に印象的に用いられた青色は、世界的に評価の高い要素の一つです。青色がいちばんきれいに出るのが水なので、浮世絵を世界に広めた大事なモチーフの一つに水があるといえるかもしれません。水があるところに文明・文化が育ち、水はどこにでもつながっているのが、人類共通のモチーフとして受け止



広重は「名所江戸百景」において数多くの水景を描いている
 (右) 歌川広重「名所江戸百景 亀戸天神境内」1856年(安政3) 国立国会図書館蔵
 (左) 歌川広重「名所江戸百景 堀切の花菖蒲」1857年(安政4) 国立国会図書館蔵

められやすかったのでしょうか。

江戸時代後期に、いわゆる「ベロ藍」、ベルリンで開発された「プルシアンブルー」と呼ばれる化学合成顔料が輸入され、浮世絵の青色に使われます。異国的な興趣から日本で受け入れられた色彩が、ヨーロッパに輸出されると今

度は「ジャパンブルー」という日本的な色彩として認められたことを思うと、文化の交流は本当におもしろいですね。

伝統的な日本の色彩表現では、淡い青色を水甕の底にある水にたとえて「甕覗」といったり、ちよつと緑がかった爽やかな「浅葱色」

など、青色でもさまざまなグラデーションがあり、澄んだ水の色、曇天の空の色など、人の気持ちを反映してくれる色でもあります。そもそも江戸の暮らしのなかには、蓼藍で染めた綿の浴衣をはじめ、衣装でも食器でも青のグラデー

ションがあふれていたと思うのです。浮世絵のなかにも青いものがたくさん出てきます。青に満ちた江戸の世界を浮世絵はうまく表現していて、その代表的な要素の一つが水です。

北斎も広重も描いていたように、水運都市・江戸から水辺は切り離せません。玉川上水、神田上水という水道が江戸市中に飲み水を送っており、

これらの水道の水を産湯とすることも、誇りとしていたことが知られます。水へのこだわりは、まさに、江戸っ子の誇りや美意識を表すものだったのかもしれない。

(2022年12月21日/リモートインタビュー)



溪斎英泉(けいさいえいせん)「仮宅の遊女」1835年(天保6)千葉県美術館蔵 濃度の異なる藍色を重ねて刷る「藍絵(あいえ)」だ

俳句と水と我が暮らし

「五七五」という十七音だけで個人がささやかな情感を詠む俳句。日本独特の短詩だが、身近なようで実は知らないことも多いのではないか。学生たちにアニメやポップスを用いて「俳句学」を講義する新鋭の俳句研究者、青木亮人さんに、俳句の歴史やその魅力、水との関係性などを聞いた。

芭蕉や子規によって
一変した価値観

俳句の源は鎌倉時代に流行した「連歌」です。連歌は五七五七七のリズムで和歌を詠んでいた貴族たちのプライベートでの遊びから生まれたと言われています。Aさ

んが五七五を詠んだらBさんが七七を詠むという漫才の掛け合いのように、お酒を飲みながら楽しんでいた。それがAさん、Bさんの後にCさんが五七五を詠んで、Dさんが七七でこたえる……その繰り返しで連歌と呼ばれるようになりました。室町時代には連歌も貴族が公の場で詠むべき詩歌と位置づけられ、戦国武将も連歌を詠むようになったのです。

ところが、そのうち「こうあるべき」と硬直化してしまったため連歌は魅力を失っていきます。江戸時代に連歌は定着したものの、独自の作品は生まれにくい状況でした。代わって台頭したのが、「俳諧」です。連歌が身分の高い人のたしなみとなる一方、庶民は笑いや下ネタなど俗な事柄を詠って楽しむようになります。それを

連歌と区別するために俳諧連歌と呼んでいたのが、略して俳諧と言われるようになりました。

俳諧を楽しんでいた層から登場したのが松尾芭蕉です。芭蕉は見事な俳諧作品を数多く生み出すと同時に、「五月雨を集めて早し最上川」など五七五で完結する「発句」を個人制作として詠んでいます。芭蕉以降の俳諧は和歌や連歌を超えて江戸期の庶民が親しむ詩歌となり、「俳聖」と呼ばれた芭蕉を尊敬する歌人として与謝蕪村や小林一茶などが生まれます。

実は、俳諧も連歌と同じように型にはまっていくのです。芭蕉を尊ぶあまりに斬新な作品が生まれにくく、個人の発句よりも集団で制作する俳諧の方が重んじられていた。明治時代になり正岡子規が彗星のように現れ、「個人が詠む五

七五で完結する発句こそ文学である」と主張し、発句を「俳句」と称するようになりました。

子規が登場することで今という俳句、五七五の十七音で完結する詩歌が成立します。子規は、明治期に渡来した西洋流の芸術観で俳諧をとらえ直し、「私」という個人の実感を詠う俳句こそ文学と考えたのです。

俳句を詠むと高まる
暮らしの「解像度」

俳句の魅力をひと言で表すならば「短いこと」。俳句は、五七五の十七音に、春夏秋冬を感じさせる季語を入れると体裁は整う。季節感と自分の周りの出来事を詠むと作品になるので、他の芸術と比べて達成感が早く得られます。

気づきもを重ね、丁寧に生きる

水澄むやとんぼうの影ゆくばかり

水筒に清水しづかに入りのぼる



インタビュー
青木亮人さん

愛媛大学教育学部 准教授

Makoto Aoki

1974年北海道小樽市生まれ。同志社大学文学部文化学科国文学専攻卒業、同大学院修了。博士(国文学)。専門は近現代俳句。『NHK出版 学びのきほん—教養としての俳句』『その眼、俳人につき』『近代俳句の諸相』など著書多数。2023年1月、『愛媛 文学の面影』三部作が第38回愛媛出版文化賞部門賞を受賞。

ただし、いざ詠もうとすると使える文字数が少なすぎて、思ったことがうまく表現できない。そういう難しさも抱えています。また、俳句には季語のない無季俳句もありますが、基本的に季語を入れることを推奨していますので、「自分にとって春とはどういう季節なのか」と季節感をあらためて考えるきっかけになります。春の代表的な花は桜ですが、「梅の後は桜」ではなく、梅の後には桃があり、さらに雪柳、連翹、木蓮などがあり、それらが少しずつ重なりながら咲く。雨も同様で、春雨があり、夏に突然降るのは夕立で、秋の霧雨や冬の時雨もあるわけです。季節の移ろいも夏から

急に秋になるのではなく、夏の残暑を感じさせる秋があれば、冬が間近に迫った秋もあります。

いざ季語を使おうとすると、草花や食べものや行事といったふだんは見過ごしていたことへの認識が求められることに気づきます。季節に限らず、いつも歩いている道、庭に咲いている花、空を飛ぶ鳥、あるいはよくすれ違う近所の人、職場の仲間たちなど自分の生活にかかわるすべてのことに対する認識がこまやかになる、つまり暮らしにかかわる「解像度」が高まるのではないかと思います。俳句を通じて認識が豊かになり、感覚も磨かれていく。それもまた俳句の大きな魅力です。

ふと立ち止まって 自分を知るきっかけに

「水」は日本人の生活すべてにかかわるものですので、俳句でも広く詠まれています。大きく分けると二つあって、一つが「季節感を伴って詠まれる水」。春の水、秋の

水というように四季の移ろいとして詠まれることが多いと思います。

もう一つは「生活にかかわる水」。水を使うことが多い料理や間接的に水がかかわる田んぼなども詠まれます。日本は川が多く海に囲まれていますし、北国なら雪も水にかかわります。雪解は春の季節で、雪解け水が集まって流れる様子を雪解川と表現したりします。四季でもっとも水を欲する季節は夏なので、夏の季節には水にまつわるものが多いです。ここで水にちなんだ句を二つ紹介します。

水澄むやとんぼうの影ゆくばかり

星野立子

「水澄む」は秋の季語です。夏は水が濁りがちですが、気温が下がると水も澄む。そこに秋の気配を感じるんですね。澄んだ水の上を飛ぶ複数のトンボをじっと見ている。そういう情景が目には浮かびます。

水筒に清水しづかに入りのぼる

篠原梵

水筒に湧水を汲んでいて、水が増えてくる様子を入りのぼると表現している。夏の水の冷たさ、きらきらとした夏の光の眩しさが感じられます。作者の子どものような眼差しも窺えます。

いずれの句も劇的な瞬間があるわけではなく、ほんとうに何気ない瞬間を詠んでいます。俳句とは、人生の意義を鮮やかに照らすというよりも、ごく平凡な風景のなかに佇む自分を知るきっかけになるものかもしれません。

俳句を通じて関心を抱くのは川なのか空なのか木々なのかといった、いつもは意識しない自身の感性に気づく瞬間があるはず。その気づきの積み重ねによって、何に対しても丁寧に見て接して感じて言葉を遣い、日々生きるようになるのではないのでしょうか。俳句とはそういうものだと私は考えています。

(2023年1月21日/リモートインタビュー)

ART
[詠む]

流れゆく川に見る 素晴らしき人生



インタビュー

松浦 寿輝さん

詩人、小説家、批評家
東京大学名誉教授

Hisaki Matsuura

1954年東京都生まれ。詩集『冬の本』で1988年に高見順賞、1995年評論『エッフェル塔試論』で吉田秀和賞、2000年小説『花腐し』で芥川賞、2005年『半島』で読売文学賞を受賞。2007年、川辺の榎み処を追われたネズミ一家が新天地を求めて旅に出る『川の光』を上梓。

なぜ「川」や「水」は詩人や作家の感性を刺激し、文学の表現に取り入れられるのだろうか？ 詩人でありフランス文学の研究者であり、また移住の旅に出たネズミ一家の冒険譚『川の光』などを著す小説家でもある松浦寿輝さんに、表現者としての「川」や「水」の存在について聞いた。

西に広がった東京から 水景は遠ざかり

私の生家は味噌屋で、上野と浅草のちょうど中間くらいの位置にありました。いわゆる下町育ちです。馴染みのある川は、江戸時代に大川と呼ばれていた隅田川です。東京の地誌でいえば、まず隅田川があり、東へ行くと荒川、さらに千葉との境には江戸川が流れていて、西へ行けば多摩川がある。子どものころは上野と浅草が身近な繁華街で、新宿や渋谷はよほどのことがないかぎり行きませんでした。

ところが、高度経済成長期に入り首都高速道路が建設され、どん

どん風景が変わっていく。それと同時に東京の中心、重心が、西へ西へと移っていきます。私の住まいも文京区、新宿区、世田谷区と西へ向かい、今は武蔵野市。徐々に徐々に隅田川から離れていった。あの川の風景からずいぶん遠ざかったな、という思いがあります。

そうした川への思い、ノスタルジーのようなものは、私が書いた詩や小説にもいろいろな形で反映されています。例えば、芥川賞を受賞した『花腐し』に「新宿や渋谷の繁華街を歩いていてそのままふと足を伸ばすと滔々と流れる水べりに出るといったことができな

いのは何とさみしいことだろう」と書いています。かつて江戸市中に飲料水を供給

していた玉川上水、神田上水も暗渠化が進みました。クマネズミの親子が工事によって川べりの棲み処を追われて旅に出る冒険譚『川の光』にも書きましたが、川に蓋をして遊歩道にする工事が進んだ結果、空が開けた川の風景、水景が抑圧されていきます。

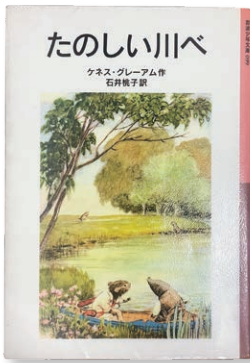
世界に目を転じると大きな都市の真ん中には必ずといってよいほど川が流れています。一時期住んでいたパリにはセーヌ川がありまして、ロンドンならばテムズ川がある。舟運など実用にも供しているのでしょうか、都市というのは多かれ少なかれ自然から切り離されているので、住んでいると気持ちが悪さがちがちなんですね。そんな人びとの心を癒すのが流れる水です。それは詩人や作家の感性を刺激し、作品を生み出す原動力ともなっていました。

しかし東京は、近代化に伴って重心が西にずれたことで隅田川が中心軸ではなくなり、暗渠化も相

まって水景が失われます。隅田川に関しては、岡本かの子が『河明り』や『生々流転』を、芝木好子が『隅田川暮色』といういずれも素晴らしい小説を残しています。東京はいわば川を見捨てて発展する道を選んだ都市だ——私はときどきそんなことを考えます。

明るい水の対極にある 流れない水、澱む水

今回の主題である表現者としての「川」や「水」について真っ先に思い浮かんだのはフランスの哲学者、ガストン・バシユラールです。バシユラールはもともと科学の認識論を研究していたのですが、晩年になって不意に科学的概念から哲学の概念を組み立てるようになります。その過程で詩的な、瞑想のようなエッセイを連作として書きはじめ、『大地と意志の夢想』『水と夢』『火の詩学』『空と夢』などを著しました。あらゆる物質的



ケネス・グレアム著・石井桃子訳『たのしい川べ』(岩波少年文庫) ネズミやモグラ、ヒキガエルなど小動物が繰り広げるさまざまな事件を詩情豊かに描く。グレアムが幼い息子のために書いたと伝わる。原題は“The Wind in the Willows”(1908年)



ガストン・バシュラール著・及川龍訳『水と夢—物質的想像力試論』(法政大学出版局)「私の楽しみは小川の流れに沿って行くことである」と記すバシュラールが、水という物質に対して人びとが抱く想像力について多様な詩や戯曲、神話から読み解く



松浦寿輝著『川の光』(中公文庫) 川のほとりで暮らしていたクマネズミ一家(タータ、チッチ兄弟とお父さん)は、ある日突然始まった河川改修(暗渠化)工事のため巣穴を追われ、イヌやネコ、スズメ、モグラなどに助けられながら上流へ遡っていく冒険譚

存在を構成する四種の元素を「地水火風」あるいは「四大」と呼びますが、バシュラールはまさにこの「地水火風」を取り上げていることがわかります。

『水と夢』では、さまざまな水のイメージと文学者の想像力をどう切り結ぶかを探究しており、そのなかでアメリカの文学者、エドガー・アラン・ポーも取り上げています。バシュラールは、ポーの想

「地水火風」のうち文学者としての私は「水」に親しんできました。「川の光」を書いたのは、玉川上水の縁に住んでいたときに川べりの道を散歩していて「このあたりの小動物はどういう生き方をしてるんだらう」と日々考えることが多く、そこからクマネズミ親子の物語を構想するに至りました。

しかし、自分の感受性の成長過程を振り返ると、イギリスの作家、ケネス・グレアムの『たのしい川べ』に大きく影響されたと思います。この小説は動物たちが人間

古い水を押し流す 新しい水と時間

水がさらさら流れる明るい川だけでなく、その対極ともいえる「流れない水」「澱む水」も文学表現の範疇に入ることがわかります。

想像力において、水は常に暗い水、黒い水として表れると分析します。一部を抜粋すると「そうすると、原初的に明るいどんな水も、エドガー・ポーにとっては、暗くなるべき水であり、黒い苦悩を吸収すべき水なのである。生き生きとしたどんな水も緩慢になり、重苦しい運命の水となるのである」と記している。

のように言葉を発して冒険する児童文学で、子どものころから愛読していました。今の子どもたちにも読み継がれてほしい傑作です。

人間の体の大部分は水でできているとはよくいわれることですが、私たちがネズミなどすべての哺乳類は水を自分の体に蓄え、それをぴっちり皮膚で覆って新陳代謝しつづけている。そういう印象があるのも、人間の生き死にを考えると、私のなかでは水のイメージが強くせり出してくるのです。

特に川は、新しい水がどんどん流れ込んで古い水を押し流していくものです。それは時間も同じで、私たちは「時間が流れる」という言い方をします。流れる時のなかで生きていくと、世界も自分も自身の周りの環境も移ろい、すべてが変わっていく。川の流れも生きている体験そのものの比喩のような部分があるのでないでしょうか。

世界が新しくなっていく素晴らしさや美しさを、はつきりと目に見える形で体験させてくれるのが川です。だから川のほとりに立つと、心地よさや快感のようなものを誰しも感じるのでないかと思えます。

(2022年12月13日 /
リモートインタビュー)



水は巡り、生も巡る

海で感じた「命の循環」

描くことを通して、動物、植物、森、海、細胞、鉱物など異なるものたちをつなぎ、生と死の在り様を探り、その作品は思考や視野をずらすものというスタンスで制作に取り組み現代美術家の大小島真木さん。千葉市美術館で行なわれた大小島さんの公開制作を伴うプロジェクト「コレスポンダンス」を訪ね、輪廻転生や水との関係性などを聞いた。







水の歌

2016, Mural

美郷町立美郷中学校常設展示《水の歌》より部分 Photo by Yu Kusanagi

鳥よ、僕の骨で大地の歌を鳴らして

土のアゴラ

2020, Series

2015, Exhibition



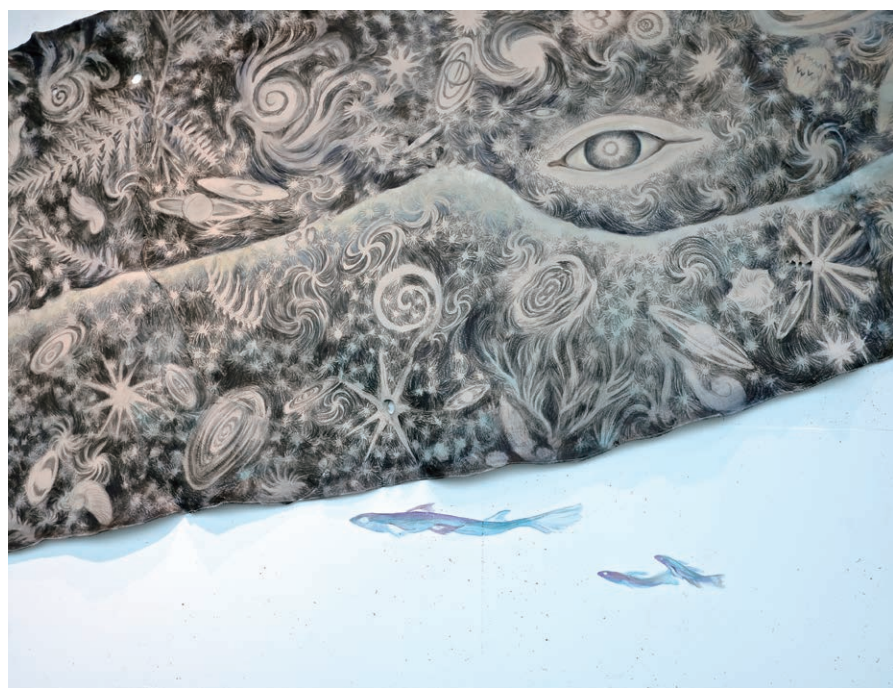
『森に食べられる』



Photo by Kenji Chiga



『うたう命、うねる心』スパイラルガーデン Photo by Norihito Iki



『46億年の記憶』太田市美術館・図書館 Photo by Serge Koutchinsky

大小島真木さんが目撃した鯨の亡骸

鯨の目

2017-2019, Series

水の文化73号 特集 芸術と水 16



大小島真木さん

現代美術家

Maki Ohkajima

1987年東京都生まれ。2011年女子美術大学大学院美術専攻修士課程修了。インド、ポーランド、中国、メキシコ、フランスなどで滞在制作。2014年にVOCA奨励賞を受賞。2017年にはアニエスベーが支援するTara Ocean財団率いる科学探査船タラ号太平洋プロジェクトに参加。異なるものたちの環世界、その「あいだ」に立ち、絡まり合う生と死の諸相を描くことを追究している。

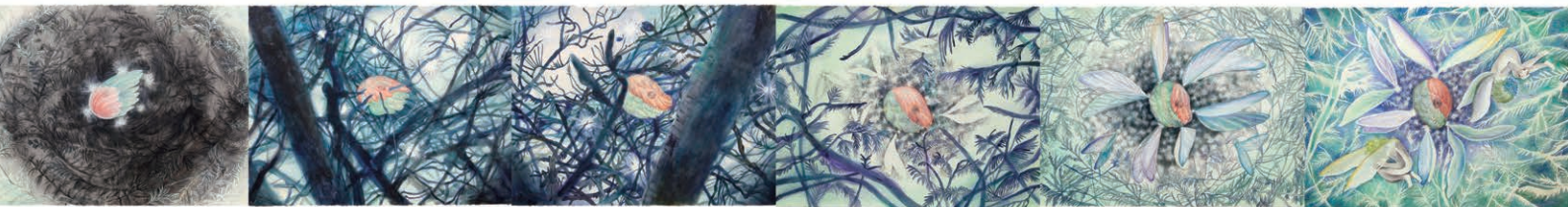


2022年10月13日から12月25日、千葉市美術館で開催された「つくりかけラボ09 コレスポンドダンス」にて撮影協力：千葉市美術館

水は大地とつながっている

秋田県美郷町の中学校に、『水の歌』と題した壁画が飾られている。現代美術家・大小島真木さんの作品だ。2016年（平成28）、美郷町での壁画制作の依頼を受けた大小島さんが、同町が擁する六郷湧水群の清水のおいしさを、そして湧水を大切に生活に取り入れている人々の暮らしに心を動かされ、『水』を作品の題材に選んだ。『水の歌』には、植物や鳥、動物たち、あらゆる生命や死を包み込む豊かな水が描かれている。

実は大小島さんにとって、湧水はとてもなじみ深い存在だった。「私が生まれ育った東久留米市は東京の外れですが、武蔵野台地からの湧き水があちこちにあり、家族でよく神社へ湧水を汲みに行ったことは、今も大切な思い出であり、私の水の原体験です」と大小島さんは言う。水は自然と切り離されたものではなく、大地からにじみ出て、川から海へと流れ、やがて森へ戻るもの。そんな大きな循環を昔から肌で感じていた。「水って何だろう。流れる水は何を運んでいるのだろうか。そこにはどんな生きものがあるんだろう。私たちも皮膚一枚で包まれた水なのかもしれない……。頭のなかに浮かぶ、そんなほんやりとした間



いを何度も描き、また形にすることで、少しずつ答えに近づき、そこからまた新しい問いへとつながっていく。私にとってアートとは、考えつづけるまなざしをもつことなんです」

大小島さんは美大生の時、屋久島に一人旅をして、森で迷子になったことがあった。もし今ここで死んだら、自分の身体は鳥や虫たちに食われ、やがて土に帰っていくのだろうか、森から出た水が雨となって森に帰るように、森のものを食べてきた生命は、最後には森に食べられるのか……。そんな感覚に襲われて以来、森と生命の循環は大小島さんにとって大きなテーマとなっていた。

海に漂う鯨が教えてくれたこと

2017年（平成29）、大小島さんはフランスの海洋科学探査船タラ号の太平洋プロジェクトに、世界公募で選ばれたアーティストとして参加した。

「それは船長をはじめ、乗組員やシェフ、科学者、ジャーナリストなどさまざまなスペシャリストたちと同じ船に乗り、寝食をともにしながら語り合い、海の上でア

ートを制作するという、2カ月にわたる貴重な体験でした」

日中は船上で作品をつくるほか、科学調査や船の作業を手伝い、夜は沖合に停泊し、月に照らされた海面を眺め思考する。クルーや科学者たちともたくさん会話をした。そのなかで、地球上の酸素は森だけがつくるのではなく、半分以上は海のプランクトンが生成していることも初めて知った。

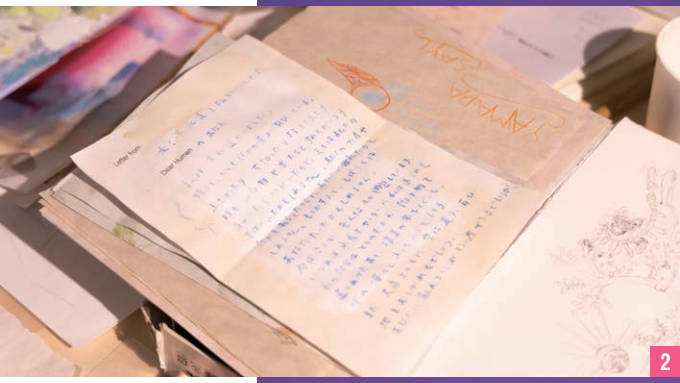
ある日、運命的な出来事があった。大小島さんの目の前に、大きな鯨が姿を現したのだ。ただし、それは生きていない、亡骸の鯨だった。

「皮が溶け落ちて、白い脂肪の塊となった巨大な鯨の身体が、たゆんだゆんと波に合わせて揺れていました。そこにたくさんの鳥や魚が集まって肉をついばみ、鯨の輪郭はぼやけて、今にも海に溶け込んでいくように思えました」

生きている間は大量の生命を食べていたであろう鯨が、自らの生命を終えたとき、今度はたくさんの生き物に食べられ、最後は海の栄養となって次の生命につながっていく。この地球の長い歴史のなかで誰の目に触れることもなく、どれだけの生命が海の中に溶け、また生まれてきたのだろうか。



1



2



3



4

1 「つくりかけラボ09 大小島真木 | コレスボンダンス」で制作に取り組む大小島さん 2 来場者が人間以外の何者かになり代わって書き残す「Dear Human」で始まる手紙。大小島さんはすべてに目を通し、呼応するように作品を変化させていく 3 会場の様子。個々の作品だけでなく、それを含めた場所全体を芸術的空間として提示するインスタレーションとなっている 4 クマがサケに食べられ、サケの背に乗った赤ん坊が卵を産む作品「領域」 撮影協力：千葉市美術館

胎児を思わせる大小島さんの陶器作品



海は生命のスープのようだ——

そう大小島さんは思った。そしてこの光景を目撃した者の責任として、鯨からのメッセージをたくさんの人に伝えなければいけないと強く感じた。その衝動が、代表作の一つである「鯨の目」シリーズへとつながっていく。

「鯨の目」シリーズは、巨大な鯨をキャンバスにして、鯨の目線で海や世界を表現した作品群だ。その一つ、『アトムと光』では、鯨の胴体で世界中で行なわれた水爆実験のきのこ雲が描かれている。それはタラ号で誰かが言った、「この大地は祖先から譲り受けたものではなく、孫たちから借りている場

母親の胎内は太古の海と同じ

所」という言葉から着想を得たものだった。この場所ではか生きていけない人間という弱い存在が、自分たちよりはるかに大きい力を手にして、未来から借りてきた大地に何をしようというのか——そう鯨が私たちに問いかけているようだ。

取材で訪れた千葉市美術館会場の入口モニターには、前述した海に浮かぶ鯨の亡骸が映し出されていた。長年自身が描いてきた森の世界と鯨のいる海の世界、この二

つが交差することで、地球の大きな循環を一層感じられるようになったという。そして今、興味をもっているのが胎児や羊水だ。
「胎児は、胎内にいるわずか十月十日の間に2億年分の進化をたどります。小さな胚が魚になり、両生類になり、哺乳類になる。それってすごいことですよ。発生学の先生の本に、母親の胎内を満たす羊水は、太古の脊椎動物が生まれた海と塩分濃度がよく似ていると書いてありました。お母さんのおなかの中は、生命のスープである海そのものなんです」
展示を見渡すと、たしかに胎児を思わせる作品が点在している。

(2022年12月12日取材)

「領域」という陶器の作品は、サケがクマを食らい、その背で赤ん坊が卵を産んでいるという不思議な光景だ。
「これはメタファー(隠喩)ではなく、見たままの意味です。クマはサケを食べますが、クマが死ぬと土になり、その土壌が川を肥沃にして、そこへサケが帰ってくることでできる。そうした生命の輪のなかに赤ん坊もいて、それがサケの卵を産み落として、ぐるぐると巡っていくのです。そして、サケとクマと赤ん坊の体をつないでいるのは、ここに描かれていなくてもやっぱり水なんです」

今、あまた数多の写真家がそれぞれ関心のある対象物を撮影し、さまざま媒体で発表している。水にかかわる自然だけでも、山や森、川、湖沼、海、雪、雲などが思い浮かぶ。なかでも、「波」を撮りつづけている僧侶が佐渡にいと聞いた。なぜ「波」なのか。強い興味を抱き、新潟港からフェリーに乗った。

一つとして同じものはない

「波」を撮りつづけて





佐渡に移り住んだ 僧侶・写真家

佐渡の玄関口、両津港から約30km北上し、最北端の鷺崎集落へ向かう。鷺崎の冬の寒さは、佐渡のなかでもひとときわ厳しい。「寶鷺山観音寺」を訪ねると、袈裟を着た梶井照陰しょういんさんが、愛犬のハナとともに迎えてくれた。梶井さんはお寺の僧侶であり、また写真家でもある。3日前に釣り上げたという大きなカツオを見せてくれた。「何十尾も釣れたので、近所の人にもお配りしました。これは切り身にして焼くか、カツオ大根にして食べようと思います」

そう話す梶井さんは、祖父から受け継いだ畑で野菜を育て、集落の人から借りた田んぼで米をつくり、目の前の海に船を出して漁もする半農半漁の暮らしを続ける。

福島県郡山市で生まれ、幼少期から新潟市内で育ち、ゴールデンウィークやお盆、お正月になると、祖父の寺のある佐渡に両親と訪れ、お寺を手伝っていた。両親は新潟市内での仕事があったため、梶井さんが大学を卒業後、祖父の寺を継ついでごうと2000年（平成12）に佐渡へ移り住んだ。佐渡で



梶井照陰「NAMI」 2004年



最近増えている「孫ターン」(注)の先駆けということになる。

写真は、小学生のころ熱中していた昆虫採集が原点。昆虫観察が好きだった梶井さんは、蝶々などを捕まえては標本にしていたが、標本にするには生きているうちに殺さなければいけない。それに耐えられず、中学生のころから写真を撮るようになった。それ以来写真独学で撮りつづけている。

何時間もかけてとらえる一瞬の波

佐渡の海や波を撮るようになった理由をこう語る。

「佐渡に渡るフェリーは、海が荒れるとかつては6mもの高さの波のなかを進むことも珍しくありませんでした。船のなかで波に揺られていると、自分と波が一体になったような感覚になります。俯瞰した海の写真はよくありますが、そうではなく、もっと低い視点から、主観的に波を撮りたいと思うようになりました。子どものころから佐渡の波を見て、体で感じた結果かもしれません」

佐渡に移り住んでから4年間撮りつづけた波の写真は、『NAMI』という写真集として2004

(注)孫ターン

祖父母が住む地方(いなか)への移住を指す。「Uターン」や「Iターン」を転用した言葉。

年（平成16）にリトルモアから発売された。1位になれば写真集を出版できるという雑誌主催のフォトコンテストで、梶井さんの作品がグランプリに選ばれたためだ。

梶井さんがとらえた波の写真は、ダイナミックでもあり、繊細でもある。特に、低い位置から撮影した写真は、波がまるで生きもののように迫ってくる。

「波を撮るとき海には入りません。波がくるギリギリの位置で這いつくばって待つて撮ります。ただし100回か1000回に一度は大きな波がくるので、注意してないと波に攫さらわれそうになります」
いい波を撮るために、同じ場所で6〜7時間カメラを構えて待ちつづけることも少なくない。ただし、いい波が撮れなくても一喜一憂することはない。

「撮影は漁とも似ていて、何も獲れない日もあれば大漁の日もあります。今日は今日でいいのです」と大らかだ。

視点は海から廻り 限界集落も撮影

波を撮りながら、関心は川へも向けられた。

「その昔、鷺崎集落は原野でした。



1



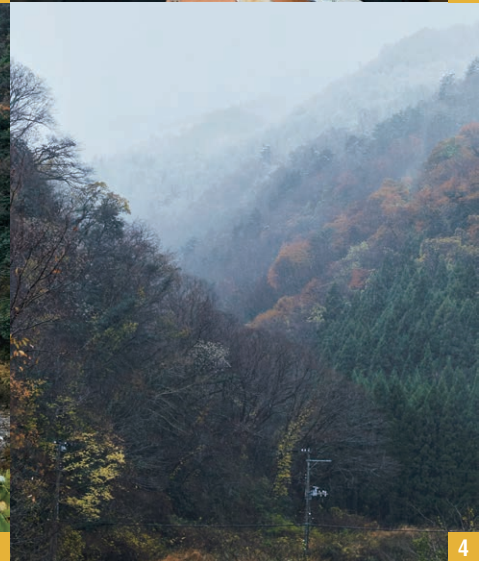
3



2



5



4

1 高台から見た鷺崎集落の港 2 愛犬のハナと梶井照陰さん。ハナは船に乗って漁にも出る 3 梶井さんが住職を務める「寶鷺山 観音寺」 4 海岸から見た佐波の山。海沿いは雨でも山は雪。標高差がよくわかる 5 両津から鷺崎集落へ向かう海沿いはこうした断崖絶壁が続く

先人が川の水を引いて田をつくり、畑を開きました。その川の水は栄養分を海に届け、魚や海藻を育てます。海の次に、生きものにとつて大事な役割を担う川を見てみると思うようになりました」

川の撮影は、南米のイグアスの滝を皮切りに、オーストラリアや

カナダ、モロッコ、ジンバブエ、中国など世界各国に及び、国内でも撮影を行なった。この一連の写真も2010年（平成22）に『KA WA』という写真集となった。

海と川のほかに、2007年（平成19）から定期的に撮影している対象に、限界集落がある。最近

は地元・鷺崎の若い人や戦争を体験したお年寄り取材して撮影し、佐波の芸術祭などで発表している。意外なことに、鷺崎が限界集落であることをあまり悲観的にとらえていない。

「鷺崎が本格的に開拓される前は7軒しかなかったそうです。また



梶井照陰「KAWA」 2010年

昔に、元の姿に戻りつつあると考
えればそう悪くない気がします。
米も野菜もとれるし、海の恵みも
あって自給自足できますから」

〈色即是空〉のような 水という存在

波や川を撮りつづけて気づいた
ことは何かを尋ねた。

「特に海は、わずかな雲行きで数
分前とは様子がガラリと変わるの
で怖さを感じることもあります。
東日本大震災で親戚の家が流され、
震災直後に物資を抱えて海の様子
を撮影しながら、岩手県の宮古や
陸前高田を回りました。佐渡で波
を撮っていたときは、海は恵みを
与えてくれる存在だと感じていた
のに、一瞬で悪魔のような存在に
もなり得ると改めて知り、それ以
来少し見方が変わりました。また、
海も川も表面だけではわからない
見え方があることを感じ、最近
は水中も撮影しています」

そう話す梶井さんは、「水は塊で
もあるがつかめない、とらえどこ
ろのない存在」だと言う。そこに
惹かれる部分もあるそうだ。

「毎日太陽の動きを見ながら撮影
していますが、太陽の昇る位置や
光の当たり方で刻々と変わる海や

川の表情は見えて飽きません。
波や流れは一つとして同じものは
ないので。その一方で危険もは
らんでいる。よく知っている目の
前の海で命を落とす地元漁師や
住民がいます。仏教の根本的な教
えの一つに〈色即是空〉という言
葉があるのですが、水の存在はこ
れにも近いと感じます」

色即是空とは「般若心経」にあ
る言葉で、目に見えるもの、形づ
くられたものは刻々と変化して
おり、不変な実体は存在しないとい
う意味だ。この話を聞いたあとに
梶井さんの写真を見直すと、一瞬
で変わる自然界の姿や変化を受け
入れ、それをとらえようとしてい
るように見えた。

(2022年12月1〜2日取材)



梶井照陰さん

写真家 僧侶

Syoin Kajii

1976年福島県生まれ。佐渡島の最北端・鷲崎で僧侶をしながら写真家として活動。日本海の波を被りながら撮った写真は作品集「NAMI」となる。波の写真撮影を継続するほか、限界集落の写真を各地で撮り、アジアに足繁く通い大乗仏教の名残も撮影。

水のようには穏やかな暮らし

映画『マザーウォーター』

映画には川や水にまつわる印象的なシーンが多い。ところがタイトルに「水(ウォーター)」と銘打っているにもかかわらず、直接的な水の表現がほとんど出てこない映画がある。『マザーウォーター』の監督、松本佳奈さんはどういふ思いでこの映画を撮ったのか。

水のある場所で 交わり流れる人

ウイスキーバー、カフェ、豆腐店。映画『マザーウォーター』(2010年)は、水にちなんだ仕事を営む女性たちを軸に、小川が流れる街で暮らす人々を描く。

『かもめ食堂』(2005年)『めがね』(2007年)『プール』(2009年)と続いた、特定の土地(順にフィンランドのヘルシンキ、鹿児島の手諭島、タイのチェンマイ)を先に決める企画の一作で、こ

の映画で選ばれたロケ地は京都だ。初めての監督作品となる松本佳奈さんは、シナリオづくりのために脚本家と京都の街を歩いた。「シンボルの鴨川(賀茂川)のほかにも白川疏水など小さな水の流れが街なかにたくさんあって。きれいな水のせせらぎがずっと聴こえているような感じが気持ちいいなというのが第一印象でした。商いや暮らしと地の水が密接にかかわっている土地だと思い、おいしい水が大切なお店をやっている女性たちの話にしました」と振り返る。

先の一連の作品同様、この映画でも登場人物の来歴や背景はわからない。どこからともなくその土地に惹かれてやってきて、互いに付かず離れず穏やかに交わり、暮らす人たちとして描かれている。今この場所で育まれた人間関係。しかも、ことさら京都の街をそ

れとわかるようには撮っていない。「長い歴史と文化をもち観光地でもありますが、一本、路地裏に入ると不思議な空気の流れる街です。脈々と続いてきた日常が素敵だなど思ったので、あえて京都というより『ある街』として描きたかったんですね」

ウイスキーバーで小林聡美さんが水割りをつくる様子が、丁寧に映し出される。マドラーで水とウイスキーと水が攪拌される動き。

公園や庭で会話をしている場面の背後の青々とした植物の葉は、いつもそよ風に揺れている。

みんなと一緒に 見守る新しい命

銭湯も、この映画に出てくる「水のある場所」の一つ。もたいまさこさんが他人の赤ちゃんをあやしたりする銭湯の脱衣所は、ま



松本 佳奈さん
映画監督

Kana Matsumoto

東京都生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。CM演出を手がけたのち、映画『めがね』(2007)でメイキング映像などを演出。2023年3月19日よりWOWOWにて監督作品『フェンス』放送・配信開始。



登場人物たちが印象的な会話を交わす賀茂川の上流付近





白川疎水沿いを行き交う人びと。この付近は映画『マザーウォーター』撮影現場の一つ

さしく水の近くで、ご近所同士が普段着のまま気さくな会話を交わす場所だ。実は、松本さんの実家は東京都板橋区の銭湯だった。

「お客さんもそうですけど、普通にご近所さんが出入りする家でした。工場で真つ黒になって働いたおじちゃんがサツパリしたり、銭湯ってみんながちよっとハッピーになって帰る場所なんです。番台で手伝いしていると、おしゃべりなおばちゃんたちの相手をするじゃないですか。あいさつ程度なんですけど、その人の暮らしを垣間見る瞬間もあって。子どもの時に肉親じゃない50〜60代の人たちとふれあう機会があったのはとてもよかったです。いろんな人生があるんだなあ、って。楽しかったしいい環境で育ちました」と松本さんは語る。



『マザーウォーター』のウイスキーバーにおけるワンシーン
提供：パップ

誰の子どもか観客にはわからない赤ちゃんをみんなで世話することも、この映画の核になっている。銭湯の光石研さんも、バーの小林聡美さんも、カフェの小泉今日子さんも、豆腐店の市川実日子さんも、家具工房の加瀬亮さんも、赤ちゃんを抱っこする。母親らしき人物は、川べりに親子で座るトツプシーンとバーで3人の女性に挨拶されている赤ちゃんを迎えに来るラストシーンのみで、その顔も定かには見えず登場するだけだ。

「それぞれ一人で生きていく人たちの話ではあるんですけど、みんな一緒に新しい命を見守っていくのはこれからの希望ですよ」

この赤ちゃんはきつと、幸せで健やかに育つにちがいない。銭湯でいるんな人たちとふれあいが育った松本さんのように。

この映画には湧き水を汲みに行くシーンが1回だけ出てくる。

「家においても水は手に入るのに、わざわざ出かけていくんです、めんどくさいはずなのに。でも、水があるからこそ人が集まってふれあいが生まれる。そういう場所は大切にしたいですよ」

(2022年12月26日/リモートインタビュー)



映画『マザーウォーター』
Blu-ray & DVD 発売中
発売元：パップ
©2010 パペリ商会

ART
【映す】

「グラスハープ」をご存じだろうか。小ささまざまなグラスを並べ、さらに「水」を入れて調律し、水で濡らした指先でグラスの縁をなぞり音をつくりだす楽器だ。世界でも数少ないプロのグラスハープ奏者、大橋エリさんにしくみと魅力を教えてもらった。

**食後に音で遊んだ
中世の貴族たち**

ずらりと並んだ小ささまざまなグラスの縁を踊るように指が滑り、その振動から生まれた美しい音色

が響きわたる——。JR中央線・

豊田駅そばの珈琲ギャラリーでは、満員の聴衆を前に大橋エリさんが「グラスハープ」を奏でていた。

グラスハープとは「天使のオルガン」と称され、中世ヨーロッパで人気を博した楽器である。ワイン

グラスの縁を指でこすった振動で水に波紋が生じる

グラスやゴブレットの縁を指先でこすり音を出すのだが、音調を整えるためにグラスのなかに水を入れ、縁をこすって振動を与えるために指先を水で濡らしながら音を奏でる。このように「水」を用いる

「癒やしの音」奏でる 水を用いた祈りの楽器

のが他の楽器にはない特徴だ。

「中世ヨーロッパの貴族たちが食事のあとにグラスをこすって音を出して遊ぶことが流行し、グラスハープと呼ばれるようになりました。また、土器をこするような行為を含めると、紀元前からあったともいわれています」

大橋さんはそう語る。モーツァルトやベートーヴェン、サン＝サーンスなど著名な作曲家たちがグラスハープのための作品を数多く残しており、ガリレオ・ガリレイも大ファンだったと伝わる。

**スムーズな演奏に
欠かせない水**

3歳からピアノを習った大橋さんは、小学校で鼓笛隊に入り、



毎年恒例のクリスマスライブでグラスハープを演奏する大橋エリさん

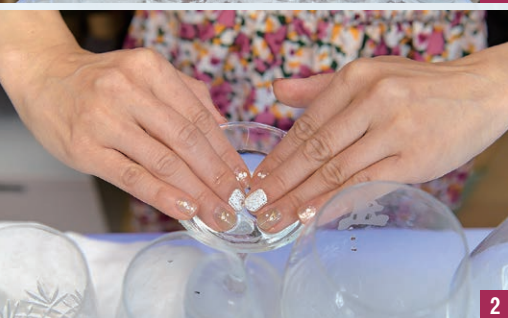


大橋 エリさん

グラスハーブ奏者/打楽器奏者

Eri Ohashi

国立音楽大学打楽器専攻卒。2005年からグラスハーブ奏者として全国で活動。2015年に発表した『ファンタジック☆グラスハーブ』をはじめ、グラスハーブのソロアルバムは3作品をリリース。



- 1 自宅に備えたスタジオでグラスハーブの魅力について語る大橋さん。ご自身のグラスハーブを調律し、実際に音を奏でてくれた
- 2 手元の小さなグラスに指を浸す。それは「祈り」にも似た行為だと語る

う行為は、私にとって『祈り』に近いもの。水は音を生んでくれる神様のような存在なんです」

天使のオルガンとも言われるグラスハーブ。水は、その美しい音色を生み出す運指をスムーズにし、また奏者の心理まで整えるという重要な役割を果たしていた。

(2022年12月10日、21日取材)



ワイングラスに水を注ぎ、音調を整える



中・高校では吹奏楽部でパーカッションを担当。打楽器の幅広さに惹かれ国立音楽大学で打楽器を専攻し、オーケストラやアンサンブル、ソロなどに取り組むなか、民族音楽をはじめとするルーツ・ミュージックに興味を抱く。

「ファウンド・パーカッションと言って、新聞紙や植木鉢など身の回りの素材を見つけて音にするのですが、その過程でグラスハーブに出合ったんです。『こんなに素敵な、魔法のような音がする素材があったんだ』と驚きました」

グラスハーブは、グラスの縁を指の腹でこすって出る音が丸いお椀状の部分で共鳴する。タンブラーなどよりもワイングラスの形状

がもつともふくよかに音を増幅させ、それが癒やしの音色となる。

また、ワイングラスは大きさや形状、厚みによってそれぞれ音が違う。大きければ低い音が、小さければ高い音が出るし、薄いグラスの音は低く、厚いグラスは高い音となる。大橋さんが用いる標準的なセットはグラス40個前後。それを演奏しやすい順に並べる。

1つのグラスに一音を割り当て、調律するため水を入れる。実はワイングラスに水を入れなくても音は鳴るのだが、欲しい音を得るには巨大なワイングラスが必要で、それは明らかに演奏を妨げる。

「水がないと困るんです。それに演奏していると、グラスのなかの水に波紋が生じるので、『あつ、いま振動から音が生まれている、神秘的だな』と思います」

ワインやビール、コーヒーを使

「祈り」にも似た指を水に浸す行為

ってほしいと言われることもあるが、水以外の液体だと、音の響きが少し止まってしまふ。特にワインは濃^おで音色が悪くなる。その土地の天然水を使ってほしいと言われることもあるが、基本的には水道水。しかし、時折水の違いを感じることもあるそう。

「『今日は水がとろとろしているな』と感じることはあります。気温など関係するので一概に水の成分とは言い切れませんが、土地によって少しずつ違う気はします」

グラスハーブを演奏する前、大橋さんは入念に手を洗う。手に脂肪が残っているとグラスの縁をこすときに滑ってしまい、摩擦が足りず音が響きにくいからだ。

グラスハーブ普及のために

2022年(令和4)7月、大橋さんは日本グラスハーブ協会を立ち上げた。合格すると会員になれる「グラスハーブ検定」も用意したが、グラスハーブを少しでも多くの人に知ってもらうために会費や受験料は一切不要だ。

中世の貴族が食後に楽しんだように、グラスハーブは自宅でも試することができる。例えばグラス5つ、ドレミファンがあれば「ジングルベル」が、グラス4つ、ドレミンがあれば「メリーさんのひつじ」が奏でられる。

「身近なグラスから音が出て、水によるちょっとした調整から音階ができていく——こうしたアナログな作業こそ、デジタル機器に囲まれた今の子どもたちに必要ではないかと思うのです」

日本グラスハーブ協会URL
<https://glasssharp-fan.com/>





これまでにない思索の場として国内外に知られつつあるアートビオトープ「水庭」。建築家の石上純也さんが手がけた。移植した樹木の間を沢から引いた水が池を通して流れ、また沢に戻る。この風景を外国から来た人たちは「極めて日本的だ」と評するという。真冬が到来する直前の「水庭」を訪ねた。

里山の延長としての アートビオトープ

苔むした地面を飛び石づたいに歩く。数多あまたの木々の間を抜け、小ささまざまな形の池を巡る。風が梢を揺らし、池と池をつなぐ水流のかすかな音が聴こえる。奥まで行くと溪流のせせらぎが心地よい。池ではカモが気持ちよさそうに水面を滑っている。

栃木の那須高原にあるアートビオトープ「水庭」は、東京ドームのグラウンドがすっぽり入る敷地（約1万7000㎡）に、絶妙な塩梅で配置された318本の落葉樹と160の池が広がる。池の水源は、すぐそばの上黒尾川かみくろおがわ。8つの取水口からパイプを通じて池に水を循環させ、最後は上黒尾川へ戻る。

コナラ、イヌシデ、ブナなど水

静かなる内省の場

沢水が木々を縫い、池を巡る



庭の318本の樹木はすべて隣地から移植したもの。プレミアムヴィラとレストランの建設予定地の樹木を伐採せず、位置を再レイアウトしている。通常の移植では、大きな枝を切り落とす「枝打ち」や、根元の部分を藁などで巻いて1年ほど寝かせる「根巻き」を施すが、それらを一切していない。日本に2台しかない特殊な重機を使って、根の周囲の土ごと、微生物も含めて隣地に移したのだ。天候や季節によっては作業できず、1日に移植可能なのは平均4本程度。構想から完成まで4年の歳月を要した。

水と木だけではない。地表を覆う苔も散策者を導く飛び石も周囲の石垣もすべてこの土地のもの。作庭した建築家の石上純也さんが言うように「生態系がそのまま引越して模様替えしたような、人間が手入れをした自然環境である里山の延長としての庭」なのだ。

「木」「水」「苔」で 土地の記憶を表現

那須は皇室の御用邸で知られるロイヤルリゾート。那須連峰の山麓で1986年（昭和61）、「アート・自然・人の共生」をテーマに、文



「水庭」を設計した建築家の石上純也さん
©CHIKASHI SUZUKI

化リゾートホテルの先駆け「二期倶楽部」が創業された。その後、創立20周年記念事業として陶芸とガラスのスタジオを備えた体験型アートレジデンス「アートビオトープ那須」を設立。二期倶楽部は

2017年(平成29)に閉館したが、その翌年、アートビオトープ那須の敷地内に誕生したのが「水庭」だ。創業者の北山ひとみさんは「私のライフワークである(アートコロニー)の一環としての文化事業です」と語る。

2007年(平成19)から実施してきたアートフェスタ「山のシユレ」もその一つ。自然の叡智を探る大人のオープンカレッジとして「庭」をテーマにセミナーを重ね、多様な対話のなかから知恵を出し合ってたどり着いた答えが「水庭」だった。

なぜ水なのか? それはここがかつては水田だったからだ。「雑木が生い茂る森林を先人が切り拓き、沢から水を引くという苦労を重ねて水田にしました。それが減反政策で牧草地となり、さらに放棄地となった。それを石上さんが『ここはかつて田んぼでした

ね」と、水田の取水口を8カ所も探し出したのです。森林と水田、牧草地と積み重ねられてきた土地の記憶、里山としての環境を、もともとここにあった木と水と苔を重ね合わせて表現するという『水庭』のコンセプトを石上さんから提示されたとき、即座に承認しました」と北山さんは振り返る。

無作為では再現できない 自然界のランダム性

石上さんは作庭にあたり、隣地の318本の樹木すべてを測量し、図面に起こし、模型をつくった。2〜3mの大きさの紙に池の形を描きながら樹木の模型を配置していく。造園や景観デザインというより、位置や角度を綿密に計算して最終的な空間の完成形を細部まで設計する建築の方法論に近い。「そのとき気づいたのは、知らないうちに樹木が整然と並んでしまうこと。自然界でのランダム性は、樹木が共存するために一定の距離を保つなど、何かしら僕らには見えないシステムが働いて生まれているはずだ。人間が無作為にレイアウトすると、おそらく情報量が少なすぎてバラバラにならないんですね。そこでコンピュータの

「雑木が生い茂る森林を先人が切り拓き、沢から水を引くという苦労を重ねて水田にしました。それが減反政策で牧草地となり、さらに放棄地となった。それを石上さんが『ここはかつて田んぼでした



1「アートビオトープ那須」のスイートヴィラ。設計は建築家の坂茂さん 2「水庭」のある「アートビオトープ那須」は工房を備えており陶芸とガラス工芸などのアート体験もできる 3「水庭」の総合プロデュースを行なった北山ひとみさん。二期倶楽部の創業者で、株式会社二期リゾート代表取締役を務める 4池と池をつなぐパイプ。水はここを流れて次の池へ流れていく。耳をすませば、パイプを通る水音が聞こえてくる 5 8つの取水口から引いた沢水は池を巡り、ここでまた沢に戻る



春夏秋冬でさまざまな表情を見せる「水庭」 提供：株式会社ニキシモ

プログラムを併用しながら少しずつずらし、模型でも確認してランダム性を生み出し、パズルを解くように樹木と池の配置を決めていきました」と石上さんは言う。

その結果、建築と同じような精度で樹木と池が配置された。

160の池をつくるのも土木作業だ。一般的な造園では3〜4個の池をつなぐと均等に水が流れにくい。溪流から水を引いて、すべての池へ均等に水が巡り、また溪流に戻す必要がある。大雨で氾濫してもいけない。

「都市での雨水排水システムのシミュレーションを行なう会社の協力を得て、160の池をどうつなぎ合わせれば氾濫せずに一定の水がスムーズに循環するかシミュレーションしました」

自然界では本来、落葉樹は水辺で生息できない。しかし、池に自然素材の防水剤を施し、排水システムも整っているので池の周りに水がにじんだりあふれ出ることがない。だから池と落葉樹が共存できている。

ここまで徹底してこだわるのは「人間が関与することで初めて成立する自然Ⅱ里山」をつくり、自然と人間との関係性の象徴の場にしたという意思があったからだ。

「水」が主役の里山で 記憶や時間を感じる

「水庭」は完成から4年を経て、台風などで倒れた木も10本ほどある。だがそれは想定内。やがて樹木は朽ちるだろうが、地面に落ちたドングリが発芽し新木に置き換わっていく。100年後は、まったく違う草木の景色になっているはず。

「ただし池だけはずっと同じ位置で留まっています。流れつづける水が環境構造のマスタープランのようなものになっているのです」

石上さんは話す。木も苔も飛び石も石垣もあるなかで、もともと水田だったこの土地の記憶をもっともよく留めるのは水。だから水を主役にし、水の経路を残すことで木々が置き換わったとしてもこの土地のアイデンティティは保てる——そう考えたそう。

落ち葉が水のパイプに詰まらないうようにするなど「水庭」は里山と同じように絶えず人の手入れを必要とする。石上さんが2019年（平成31）に「水庭」で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞したとき、選考者の一人、建築家の内藤廣さんは次のようなコメントを寄

せた。

「こんな風景は自然の中には存在しない。だから、少しでも人が手を緩めると崩壊してしまうフィクションであり、その蜻蛉^{かげろう}のような儚^{はかな}さが人を引き付ける。危うい姿勢でつま先立ちをして語り掛ける静寂。自然とは何か。人とは何か。それは、精神の深奥に語り掛ける美しい逆説である」（原文より抜粋）

この文章をこよなく愛する北山さんは、「『水庭』は公園ではなく内省の場です。ライトアップなどという俗っぽいことはしません。月明りで十分です。今の、結果だけを追い求める社会でなんとか記憶を伝えたい。ここに佇んで、美しい水の景色にご自身の人生を重ね合わせ、目に見えない土地の記憶や時間を感じとっていただけ」と願っている。

（2022年12月16日、24日、27日取材）

ART
【見つめる】



上空から見た「水庭」の飛び石。大きな石が使われているところは周囲を、小さな石が続くところは地面の様子を見てほしいという意図がある
提供：株式会社ニキシモ

※「水庭」見学には事前予約が必要（前日17時まで）。「ガイド付き水庭ツアー」は11:00と14:00があり、料金は1名につき2970円（税込）。ランチ、ディナー付きのコースもある。宿泊者は無料で自由に見学できる。申し込み方法などの詳細はHP参照。 https://www.artbiotop.jp/water_garden/

映画『セノータ』



泉を浮遊してとらえた

光と陰

「傑作」と激賞されるドキュメンタリー映画がある。タイトルは『セノーテ』。かつて生贄が捧げられたとも伝わる、ユカタン半島に点在する泉の名だ。前作『鉱A R A G A N E』では地下に潜り、『セノーテ』では水中に潜った小田香さんは、何を感じたのか。

マヤ神話と重ねて描かれる水中の光

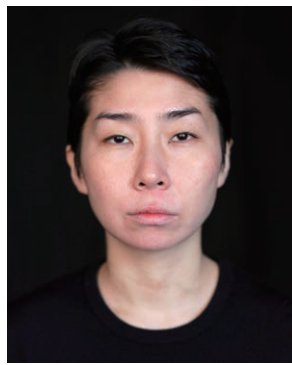
メキシコのユカタン半島北部に「セノーテ」と呼ばれる洞窟内の泉が点在している。古代マヤ文明の時代、川も湖もないこの地では

唯一の水源で、雨乞いのため生贄が捧げられた神話的な場所でもあった。大きな泉は遺跡として観光地になっているが、今でもマヤに先祖をもつ人々が周辺で暮らし、水源としているセノーテもある。石灰岩の断崖に囲まれたこの泉をテーマに、マヤ神話と重ねて水

中洞窟の様子と地上の暮らしを行き来するドキュメンタリー映画が『セノーテ』（2019年）だ。

監督・撮影の小田香さんは、メキシコの友人を通じて見せてもらった写真をきっかけに、撮影しながらの現地リサーチを始めた。「セノーテは陥没した穴に地下水

小田香さんの映画『セノーテ』の劇中画像。現世の光に対し、時間が積み重なったかのような水底の陰。そのコントラストが美しい 提供：スリーピン



©Miura Hiroyuki

小田 香さん

フィルムメーカー

Kaori Oda

1987年大阪府生まれ。『ノイズが言うには』がなら国際映画祭2011 NARA-wave部門で観客賞を受賞。『鉦ARAGANE』が山形国際ドキュメンタリー映画祭2015・アジア千波万波部門の特別賞を受賞。2020年に設立された大島渚賞の第1回受賞者となった。

が溜まった泉なので上から太陽の光が差ししています。大きめのセノ一テで少年が鳶につかまってターザンみたいな遊びをしている写真を見て、行ってみたいなど思ってたんですね。それと、どの作品でも水の表現が豊かなアンドレイ・タルコフスキーの映画を思い出し、自分でも水を撮ったらどんな感じになるんだろう、水のなかの光ってどんな風だろう、と興味が湧き

影のためにダイビンググライセンサーを取得。ベテランのダイバーに後ろから付き添ってもらい撮影した。大型の水中カメラでは体ごと水圧で持っていかれるので、カメラの性能が高度化しているスマートフォンを潜水用ケースに入れて使ったが、動かすとモニターが反射し撮影中はほぼ確認できない。「水中では危険と隣り合わせで必し、おおよそのフレ

ました」と小田さんは語る。

映画の冒頭、地上からの太陽光をプリズムのようにとらえ、万華鏡さながら、色とりどりの様態を生み出す水の挙動の美しさに思わず息を呑み、目を奪われる。さぞかし綿密に計算して撮影したのだろうと思いきや「まったくまた撮られた」のだと言う。

水中はスマートフォンのカメラで撮影された。そもそもカナヅチだった小田さんは、この映画の撮

になりました」

事前に想定していた以上の映像が撮れたという。何かあったら命を落としかねない過酷な環境で自分がどういふ反応をするか。怖い気持ちだがだんだん高まっていく。自身で撮影しているからこそ、そんな変化が潜水場面の編集をしているとわかった。その感覚はたしかに観客も共有できる。水中洞窟の横道に迷い込んで行方不明になった人たちが「セノ一テの主」に

し、おおよそのフレミングだけ決め、なんとなくこういうものが映るだろう、と思いつきながら撮っていました。何回かやっていたらうちに映像でとらえられるものが想像できるようになりました」



捧げられた生贄として伝わったのかもしれない。黄泉の国への入口。「水中の呼吸音だけが自分の身体が存在する証のようでした」という実感のこもった映像から、マヤ神話の一端を垣間見る。

得体の知れない 水への畏敬の念

小田さんは米国バージニア州ホリンズ大学の卒業制作の中編映画『ノイズが言うには』で注目され、2013年、ハンガリーの映画監督、タル・ペーラが指導するプログラム「filmfactory」(3年間の映画制作博士課程)の第1期生として招聘された。俳優と協働する課題として出された原作、フランチ・カフカの短編『バケツの騎士』は、寒さに耐えかねた貧しい男がストー

ブの石炭を恵んでもらう話だが、ふと「その石炭はどこから来るのか」と思い、ボスニア・ヘルツェゴビナの首都、サラエボ近郊の炭鉱へ取材に行った。「暗闇の地下は湿度が高く、たちこめている霧にヘッドランプが反射し、その光のあり方が魅力的でした。過酷な労働環境ですが同時に美しく見えたんですね。採掘重機の爆音を全身に浴びつづけて地上に戻ってくると、なんともいえない高揚感に包まれました」

地下300mの異空間を映画として提示したい。そうして完成した長編デビュー作が『鉦ARAGANE』(2015年)だ。

地下世界の光と闇に魅せられた小田さんが「次は水のなかの光と闇を撮りたい」と思ったのは必然だったのかもしれない。メキシコ

映画『セノ一テ』には現地の人びとや祝祭、闘牛のシーンなどもあるので生と死が際立つ。しかし、不思議なことに生と死の間に断絶はなく、むしろ対のものであると感じる 提供：スリーピン



人の学友とのランチでそのことをなげなく話すと、互いの帰国後に神秘的な泉を紹介され、彼女の協力を得て『セノーテ』が完成した。「2年間で3回行なったりサーチでは村から村へ巡り、家庭用水として使われている小さなものから海につながる大きなものまで30を超えるセノーテに入りました。現地のガイドにセノーテの近くで暮

らす人々を紹介してもらい、泉にまつわる記憶や伝承、マヤとのかわりについて話を聞きました」鶏や豚の肉をさばっていた男性が突然、マヤ演劇の台詞を朗誦しはじめた。その場面は映画でも使われている。小田さんの映画に登場する、生活の年輪が刻まれた「顔」が皆すばらしい。カメラを見つめる目から「ちゃんと生きて

る？」と問い返されているような気さえする。「龍が出てくるとか主がいるとか、村の人たちが幼少期に聞いた記憶は伝説に由来します。子どものころは遊び場としての水辺ですが、大人になると生きていくための生活用水になる」とセノーテの取材で思った小田さんだが、自身で潜ってみると「一定の恐怖心を超え

たら、不思議な安心感がありました。水という得体の知れないものに対する畏敬の念というか……」。今は日本各地の地下を撮りつづけている。国内の異空間を小田さんはどうとらえるのだろうか。
(2023年1月14日/リモートインタビュー)

ART
【潜る】

セノーテで泳ぐ人びと、水中から地上を見上げた神秘的な光景など印象的なシーンが相次ぐ映画『セノーテ』。さらに独白のようなナレーションが入ることで、時空を超えたかのような錯覚に陥る 提供：スリーピン

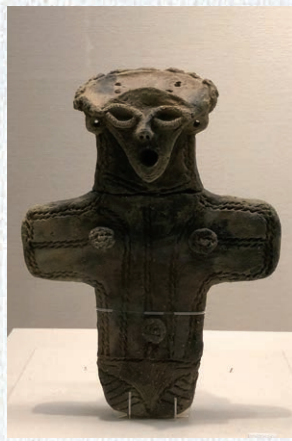


芸術と向き合えば わくわくする日々が訪れる

岡本太郎が発見した 日本の原初的芸術

呆けたように見ていた。なんだろう、この異様な姿形は。いったい何を伝えたかったんだろう……。

2018年(平成30)の夏、岩木川取



特別史跡 三内丸山遺跡から出土した重要文化財「大型板状土偶」(おおがたばんじょうどぐう)。約5000年前、縄文時代中期の紀元前3000年ごろのもの 三内丸山遺跡センター蔵



青森県八戸市の風張1遺跡から出土した国宝「合掌土偶」。正面で手を合わせた姿勢からその名がついた。縄文時代後期、紀元前2000年~1000年前のもの 八戸市教育委員会蔵

材の前に三内丸山遺跡を初めて訪ねた。縄文土偶の展覧会「あおもり土偶展」が開かれており、縄文時代の土偶たちがずらりと並んでいた。

今こそ縄文土器やこれら土偶は日本が誇るべき原初的な芸術と見なされているが、かつてはそうではなかった。縄文土器を芸術の問題として初めて取り上げたのは、「芸術は爆発だ」のフレーズと万博記念公園に今も残る『太陽の塔』で知られる岡本太郎だ。

1952年(昭和27)、太郎は縄文土器に触れたとき「からだじゅうがひっかきまわされるような気がしました。やがてなんともいえない快感が血管の中を駆けめぐり、モリモリ力があふれ、吹きおこるのを覚えたのです」と著書『日本の伝統』に記す。太郎が発見した縄文文化は、今もさまざまな分野に影響を与えている。

自分が感じた世界を 静かに楽しむ

翻って現代に目を転じると、コロナ

禍において一部の芸術、芸術活動は不要不急だと騒がれたことは記憶に新しい。楽しみにしていた展覧会やライブが次々と中止されるのを悲しく思った人たちは多いはずだ。無観客でライブを行ない、それをWebで配信するミュージシャンも現れた。みんなが芸術に飢えていた。

以前から浮かんでは消えていた「芸術と水」というテーマに編集部が取り組もうと決めたのは、コロナ禍に起きたこれらの出来事がきっかけだった。2022年度は、コロナ禍で抑えざるを得なかった「遠くへ行きたい」という人びとの気持ちに寄り添おうと、71号で「南西諸島 水紀行」を、72号で「温泉の湯悦」を企画し、今号は「芸術が不要不急であるはずはない」という思いから企画した。

ところで、芸術とは何だろうか。百科事典には「独自の価値を創造しようとする人間固有の活動の一つを総称する語」とある。芸術文明史家である鶴岡真弓さんの編著『芸術人類学講義』をひも解くと、「アートart」はラ

テン語の「アルスars」が語源で、その概念は医療や土木技術など人間がなすあらゆる「技/術」を指していた。そこから特に「限りある生に、限りない時空をもたらそうとする大いなる営み」が芸術と呼ばれるようになったという。

こう聞くと「芸術ってハードルが高い」と感じる人がいるかもしれないが、決して難解なものではない。69号「水の余話」で小池俊雄さんが私たちに紹介してくれた画家の富岡惣一郎は「トミオカホワイト」と名づけた白い絵の具を用いて雪国を巡り描いた表現者だが、生前こう語っていたという。

「画を難しく考えることはない。好きな画を見つけ、自分なりに感じとる世界を静かに楽しめばよい」(トミオカホワイトの世界)

昨夏、トミオカホワイト美術館で開催された「生誕100年記念 永遠に」を観た。「白」の美を追求し、「白の世界」を表現しつづけた富岡は「雪」のイメージが強かったが、意外なことに「水」も描いていた。

表現者たちの 心的な水、身体的な水

芸術にはさまざまな分野がある。当センターのアドバイザーや連載執筆陣など水に関心が高い人たちに助言を受けたうえで、編集部が取材先やテーマを決めた。自らの思いを水に託し作品にした表現者、日本古来の芸術を思索している研究者に、「水は芸術にとってあなたにとってどのような存在なのか」と聞いた。すると、表現者たちには原体験として「水の記憶」があることがわかった。

水と人について「人間をはじめとする哺乳類みたいな生命体は、水を自分の体のなかに蓄えて、それをびっちり」と皮膚で覆い、新陳代謝しつづけている」と松浦寿輝さんは言い、「人間とは水を皮膚で覆った水袋のようなものではないか」と大小島真木さんも言う。松浦さんは隅田川を身近な自然として育ち、大小島さんは幼少期に家族と湧水を汲みに行った思い出をもつ。

梶井照陰さんは海に囲まれた島で暮らし、先人が川の水を引いた田んぼで稲を育て、目の前に広がる豊饒なる海へ舟をこぎ出し魚を獲る。松本佳奈さんは実家がかつて銭湯を営んでおり、地下水を沸かした大きな風呂が身近だった。湯に浸かって元気になって帰っていく人びとを番台から見つめた。

一方、水に触れたことで認識が変わったと語るのは大橋エリさんと小田香

さんだ。大橋さんはガラスの水が震える様子を音が生まれる瞬間ととらえる。

小田さんはユカタン半島に点在する泉「セノーテ」に潜り、自分がどこにいるのかわからなくなる感覚に陥りながら撮影しつづけて、水への畏敬の念を抱くようになった。

「身体を通じて水と触れることは、表現者の内面に変化を呼び起こす。」

日本古来の芸術と 水・水辺が示すもの

数多ある日本古来の芸術からは「浮世絵」と「俳句」に焦点を当てた。連歌から俳諧、俳諧連歌から俳句へ。青木亮人さんに教えていただいた俳句の歴史は興味深い。徐々に裾野が広がっていくと同時に、「型」にはまって新鮮味を失うと、松尾芭蕉や正岡子規のような破壊者が現れ、それまでの価値観をつくり直して俳句は息を吹き返す。それは、俳句に限らずこの世のあらゆるものと共通しているようだ。

梅雨、夕立、驟雨など雨の表現が多彩なこの国で、暮らしのなかのささやかな出来事に目をとめ、感じたことをたった十七字で詠む——日々を丁寧に生きることもつながる俳句に強い興味を抱いた。

川、海、池など水辺を多く描いた江戸時代の浮世絵がヨーロッパの絵画、特に印象派に影響を与えたのは、藤澤紫さんが指摘したように浮世絵が庶民の平穏な日常を描いていたからだ。



富岡惣一郎「田子倉湖・冬A」提供：南魚沼市トミオカホホワイト美術館
この画は水を張った湖ではなく、風に揺れた一瞬の水をとらえた作品と解釈されている

逆によりヨーロッパの絵画は、18世紀まで名もなき庶民など描かなかったそう

だ。1867年（慶応3）に開かれたパリ万国博覧会などを通じて浮世絵が知られるようになり、ゴッホ、マネ、モネといった印象派の画家たちが傾倒していく。19世紀後半から20世紀初頭にかけてヨーロッパやアメリカで起こった日本文化の流行は「ジャポニスム」と呼ばれる。日本人として誇らしいが、本質はそこではない。

巻頭言「ひとしづく」の執筆を依頼した千住博さんは、著書『芸術とは何か』で浮世絵の影響を受けた印象派の作品がのちに日本へ逆輸入されたことを「同じ人間としての真実味を伝え、宗教も思想も哲学も超え、人間として共感され、受け入れられたことは当

然」と記す。ほんとうにいいものは国境を越えて伝わっていく。

「水」を切り口に 対話した表現者たち

特集を通じて、たぐさんの芸術作品に接した。生きること、死ぬこと、私たちはどこから来てどこに向かうのか——ふだん突き詰めて考えないことを考えさせられる、豊かな時間だった。

川は止めることなく流れゆく時間を、そして生きている実感をもたらず存在だと語ってくれた松浦さん。小説『川の光』を読み返してネズミ一家の冒険にわくわくした。光が跳ねてきらきらした川の情景が目につかぶようだ。

大小島さんの公開制作を伴うプロジェクトを訪ねた編集部は、人間以外の何かになりきって、人間に向けて「Dear Human」で始まる手紙を書き残した。大小島さんの作品は、やさし

く、時に厳しいまなざしで、「考えることをやめちゃいけないよ」と私たちに語りかけてくる。もう一度この世界を見つめ直そうという気持ちになった。

海を渡る風や震動によって生まれる波は一つとして同じものはない、と話す梶井さん。佐渡を離れ、あらためて写真集『NAMI』をめくると、波を撮っているようでいて実は一瞬として同じものはない自然の儂さ、尊さ、美しさを撮っていることに気づいた。

あからさまに水を映さなくても水の気配が色濃く漂う松本さんの映画『マザーウォーター』。その静かで優しい世界に浸った。流れに身を任せながらも自分の気持ちに正直に生きている人たちのそばには、決まって水が寄り添っているにちがいない。あたりまえすぎて忘れそうだけれど大切なことを、この映画は思い出させてくれる。

独学でグラスハープの演奏を習得した大橋さんのクリスマスライブで聴いたグラスハープの音色は美しかった。一つの音が水の力も借りて膨らんでいくと同時に、別の音が重なる。夢見心地になるような、何とも言えない心地よさを感じる。演奏の合間にそっと指を水に浸す動作を、大橋さんは「祈りに似た行為」と口にした。

那須の山麓で「水庭」の石の椅子に座り、溪流のせせらぎと池と池の間を流れるパイプからの水音に耳を澄ませ、

物思いに耽った。「水庭」の160もの池は、かつて水田だった土地の記憶をつなぐ。川や海と比べると池は静的で、記憶を積み重ねるようなイメージだ。ユカタン半島北部に点在する泉「セノーテ」は時々人を呑み込むうえ、死

体が上がらないこともある。底に沈んだ人を魚がついばんだとすれば、その魚を親とする稚魚はそれを体内に蓄えているかもしれない。映画『セノーテ』の小田さんのカメラワークからそんな妄想が広がった。今は日本各地の地下を掘りつづけている。遠い国の神話的な泉の次は、身近な異空間をどのようにに生々しくとらえてくれるのか、そこにも水が流れているのだろうか。

印象的だったのは、水を切り口に作品について表現者に尋ねると、秘めた思いや創作に対する姿勢、哲学が浮き彫りになることだ。皆、真摯にこちらの問いに答えてくれたし、聞く側にとっては水という切り口があったからこそ、より深く話を聞くことができた。

「自分が感じたことを他者に伝えたい」という思いから芸術は生まれる。千住さんの言葉を借りれば、芸術は人間同士「イメージネーションのコミュニケーション」にほかならない。

今を生きる私たちの 芸術との向き合い方

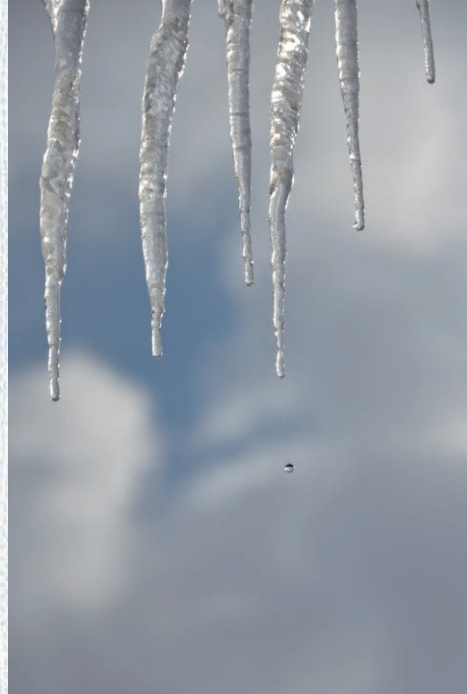
再び岡本太郎の言葉を借りる。作品の前に立ち、誰の作なのかを気にして、巨匠のものだと知ると感心したふりな

どしなくていい、芸術がわからないと馬鹿にされるのではないかと心配などしなくていいと太郎は説く。「それらの作品を自分の生きる責任において、じっと見つめてもらなさい」とも。他の多くの表現者も、芸術に知識はいらない、ただ自分が感動するかどうか、心惹かれるかどうかでいいと言う。

『水の文化』の読者には、日ごろから芸術に慣れ親しんでいる人もいれば、ちょっと苦手という人もいると思うけれど、水には関心が高いはず。芸術に親しんでいる人ならば、自分の好みではない分野に触れるときに水を入口にしてはどうか。苦手意識のある人ならば、手始めに水をテーマにした作品に触れるのはどうだろう。新しい生き方が見つかるという大げさかもしれないけれど、もの見方や感じ方が変わる可能性はあると思う。

それまで誰も芸術とは思わなかった縄文土器に触れ衝撃を受けた岡本太郎のように、さまざまな作品に触れて刺激を受け、モリモリと力漲ることを感じて、未だ来ない「未来」を夢想したい。同じ作品を見て友人と語り合えば、他者をより深く理解できると同時につながりも生むだろう。それは個々が孤立しがちで、分断社会と呼ばれる混沌とした今の時代を生きるための知恵や力や支えになるはずだ。

芸術が不要不急？ とんでもない！ いろいろな芸術作品を見て、聴いて、触れて、たまに自分でも何かを試みて、わくわくする毎日を通じたい。



氷柱から溶け落ちる一滴の水を捉えた写真。表現者たちの作品と話に触発された編集部の一人が撮った



督乗丸の重吉たちが上陸したサンタバーバラにあるオールドミッション

2015年8月4日 筆者撮影



宝順丸の音吉たちが漂着したと伝わるフラッター岬

2007年8月19日 筆者撮影

遙かなる大海原を越えて

斎藤善之

以前アメリカに滞在する機会があり西海岸の港町を調べて歩いた。その際念願だった西海岸に漂着した日本人漂流民の足跡も訪ねてまわった。江戸時代の漂流事件は400件余り知られているが、そのうちアメリカ西海岸に漂着したのは4件のみで、うち2件は尾州廻船であった。ひとつは文化10年(1833)に漂流した名古屋の廻船督乗丸で、知多半田出身の船頭重吉が残した『船長日記』で知られる。彼らは世界の漂流史上で最長記録とされる484日もの漂流の末、カリフォルニア沖でイギリス商船に救助され、サンタバーバラに上陸した。そこは当時スペイン領で、現在も残るオールドミッション(キリスト教伝道所)は1786年創建とされるから、重吉ら漂流民たちも目にしたであろう。彼らはどのような思いでこれを眺めたのだろうか。

もうひとつは天保3年(1832)に漂流した知多半島小野浦の廻船宝順丸で、1年2カ月の漂流後、カナダ国境に接するワシントン州オリンピック半島フラッター岬付近に漂着したとされる。そこは今、オリンピック国立公園となり豊かな自然が残されている。森のなかのトレイルを抜けるとそこに壮大な太平洋の大海原が広がる。今から190年ほど前、遠州灘からおよそ1万km、14カ月の漂流の末に音吉たち3人の水主がこのあたりに漂着したのであった。その断崖に立った時、この大海原がはるかな日本とたしかにつながっているという実感が押し寄せてきた。ちなみに東日本大震災から1年9カ月を経た2012年12月、オリンピック半島のこのあたりに青森県の港から流出した浮棧橋が漂着している。



Yoshiyuki Saito

東北学院大学経営学部教授。1958年生まれ。1987年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得。1995年「内海船と幕藩制市場の解体」で文学博士。日本福祉大学知多半島総合研究所嘱託研究員などを経て現職。専門は日本近世史、海運港湾史。

京水菜でいただく はりはり鍋

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、京野菜の「水菜」を用いた関西の冬の風物詩「はりはり鍋」です。



地下水で育まれた 京都原産の「京水菜」

寒さに強く、冬に収穫時期を迎える水菜。今でこそ全国のスーパーマーケットに並んでいるが、原産は京都で、冬の到来を告げる京野菜として「京水菜」と呼ばれ親しまれてきた。京菜とも呼ばれる。京野菜の記録は、古いもので16世紀(室町後期〜安土桃山時代)にまで遡る。

「生育に十分な水が必要とする水菜が京都で栽培されるようになったのは、豊かな水のおかげです」

そう教えてくれたのは、京都府立大学 京都和食文化研究センターの佐藤洋一郎さん。桂川や鴨川など大きな川が何本か流れる京都は、北の方で降る雨や雪の影響で、地下には琵琶湖の8割に匹敵するほどの水が溜まっているといわれる。地下水が豊富なのである。

特に東側は砂礫質。浅い地層から良質の水が得られるため、今もまちなかの至るところに井戸がある。そのため京水菜や賀茂なす、九条ねぎといった京野菜の栽培、豆腐の製造など、水の恩恵を受けた産業や文化が古くから発達した。

庶民に親しまれる 「はりはり鍋」

旬の京水菜を楽しむ名物料理が「はりはり鍋」だ。材料は基本的に

肉、京水菜、和風だし汁の3つ。はりはり鍋は大阪のある飲食店が考案したとされる。名の由来は、水菜のシャキシャキとした触感を「ハリハリ」と表現したところ。かつてはくじら肉を入れていたが、今は豚肉など他の肉を使うことも増えている。佐藤さんは、はりはり鍋が京都で食されるようになったのは半世紀ほど前ではないかと推測する。

「私は幼少期を大阪で過ごしましたが、家で焼き焼きといえははりはり鍋で、当時はへくじらの焼きき」と呼んでいました。水菜もくじら肉も安かったので、経済的だったのでしょう。今ははりはり鍋というと高級なイメージもありますが、昔は庶民の食べものでした」と佐藤さんは言う。

京水菜を用いたはりはり鍋を提供する「おぼんざい 和さび」を訪ねた。和さびのはりはり鍋は、だし汁に京水菜や油揚げ、豆腐などを入れて味わう。水菜本来のシャキッとした食感をそのまま楽しむなら、だし汁にサッとくぐらせるくらいがベストだそう。

「はりはり鍋はお酒を飲んだ後のシメの一品として人気です。年配の人には馴染み深い料理ですが、今の若い人は知らない人も多いん

です。むしろ京都以外に住む人たちの方がよく知っています」と、店主の寺井友一さんは話す。

伝統野菜を味わって 未来につながる食文化

ビタミンやミネラル、食物繊維も豊富な京水菜は、栽培技術が発達する前は冬場の貴重な青物野菜だった。今はサラダで味わうことも多いが、本来は煮たり炊いたりして食べるものだと言います。そういつた意味でもはりはり鍋は、京水菜を味わうにはおすすめの料理だそう。

「京水菜をはじめとする日本各地に残る伝統的な野菜を食すことは、日本古来の食文化を守ることにつながります。現代の人びとは伝統野菜をあまり食べなくなっていますが、ぜひ京水菜以外の京野菜もいろいろなレシピで試してみてください。そして、それぞれの家庭で自分たちの味を見つけて、次世代につないでいく。それが、ひいては大きな課題になっている日本の食糧自給率を高めることにもつながるのです」

京水菜という伝統野菜を用いたはりはり鍋を通じて、これからの食のあり方も改めて考えたい。

(2023年1月13日取材)



はりはり鍋の下ごしらえ

- 1 水菜をきれいに洗ったら、4~5cm幅の食べやすい大きさに切る。1人分の目安は約2株
- 2 油揚げはほどよく焦げ目がつくくらいにバーナーで炙ることで、香ばしさとうま味が出る。炙ったら幅2cmほどに切る。1人分の目安は1枚
- 3 豆腐を切る。1人分の目安は1/4丁
- 4 好んで鶏肉や豚肉などの肉、香りづけにゆずの皮などを盛りつけて完成(写真は約3人分)。家庭で楽しむ場合、だしは市販の和風だしを準備すればOK



- 1 京都のまちなかを流れる白川疏水。昔ながらの豆腐店などが今も点在し、水が豊かなことを伝えてくれる
- 2 京都府立大学 京都和食文化研究センターの佐藤洋一郎さん。同大学文学部特別専任教授を務める。2021年4月から「ふじのくに地球環境史ミュージアム」館長に着任
- 3 「おぼんざい 和さび」店主の寺井友一さん
- 4 和さびの外観
- 5 京水菜の栽培風景。もともと畔に流水を引き育てたことから水菜と名づけられた 提供：京都府山城広域振興局



[取材協力] おぼんざい 和さび
京都市北区紫野宮東町10-3 ルモン紫野
Tel.075-441-8388 営業時間17時~22時(月曜定休)

「水」と「移住者」から捉えた 真鶴のコミュニティ



2022年11月20日、真鶴町民センターで
 実施した「研究成果発表会」

地 域が抱える水とコミュニティにかかわる課題を、若者たちがワークショップやフィールドワークを通じて議論し、その解決策を提案する研究活動「みず・ひと・まちの未来モデル」。2年目は神奈川県「真鶴町^{まなづるまち}」を舞台に研究活動が続けてきました。

2022年（令和4）7月30日から8月2日の3泊4日でゼミ合宿を実施（詳細は72号参照。二次元コードあり）。9月以降も野田岳仁さんとゼミ生12名、ミツカン若手社員3名はゼミ活動とそれ以外の時間も使って、調査した成果をまとめていきました。

真鶴町役場のご厚意によって、2022年11月20日、町民の方々を対象とした「研究成果発表会」を実施。当日は雨が降り風も強まるというあいにくの天気でしたが、たくさんの人びとが足を運んでくれました。発表が終わったあとは、調査にご協力くださった方々とゼミ生たちが交流する場面もありました。

2年目の「真鶴編」は今回が最終回となります。野田さんに真鶴町の調査から得られた成果を総括していただきます。



72号はこちら



野田岳仁

法政大学
現代福祉学部 准教授

Takehito Noda

1981年岐阜県関市生まれ。2015年3月早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士(人間科学)。2019年4月より現職。専門は社会学(環境社会学・地域社会学・観光社会学)。

「水」からみえてきた 生活互助のしくみ

私たちの研究テーマは2つあった。

ひとつは、真鶴町の未来モデルの根底には「水」があることをふまえて、いま改めて「水」を切り口に真鶴町を捉え直してみようと考えた。

じつさに調査をしてみると、岩地区では豊かな水に恵まれ、湧水を水源とした水道組合(1961年設立の「佐藤清次水道組合」)が存続していることがわかった。

そこで驚いたのは、この水道組合は岩中央自治会(以下、岩中央)の「となり組」という近隣組織を母体として運営されていたことだった。というのも、岩地区を調査していると、住民からは「岩地区は人のつながりが強い」と誇らしげに語られることが相次いでおり、岩中央の人のつながりの強さと「となり組」の働きは無関係ではな



いと感じたからである。岩中央の加入率は74・1%で、町内で突出して高いこともデータからわかっていった。

真鶴町において「となり組」は、自治会組織の下部組織にあたり、回覧板を回したり、ゴミ集積所の管理が主だった機能とされる。

しかしながら、岩中央の「となり組」では、水道組合(10組)に限らず、冠婚葬祭、兒子神社の祭祀、灯籠流しの運営は組単位で行い、溝掃除(3、8、9組、弁天様の世話(6組)が行われており、かつての無尽講や稲荷講も「となり組」を母体としたものだった。

すなわち、岩中央の「となり組」は、人びとのもっとも身近な生活互助の単位となつてさまざまな機能をもっていることが明らかになった。

さらに象徴的なのは、町が策定する「地区防災計画」において、通常は自治会が想定されるところ

を「となり組」の単位まで落とし込んで細かく策定していたことだった。災害時は、平時の人のつながりの濃淡

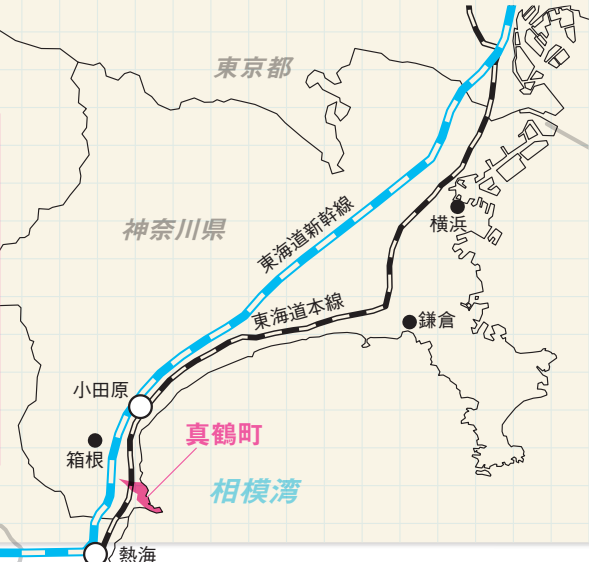
が生存を左右しかねないからだ。岩中央の人のつながりが強い理由は、「となり組」が生活互助の単位として機能していることにあるといえるだろう。

まちづくり政策と「生活の単位」のズレ

このことを現在の国や地方自治体によるコミュニティ・まちづくり政策の動向と照らし合わせてみると、意外なことに、真逆のベクトルを示していることに気づく。1990年代以降、国や地方自治体は、小学校区をまちづくりの基本的な単位に想定している。

一般的には、「まちづくり協議会」や「地域運営組織」と呼ばれる小学校区内の自治会や商店会、PTAなどの地域組織が参加し、住民主体のまちづくりを実現する組織体である。

既存の自治会の担い手は高齢化し、いわゆるコミュニティ機能の低下が懸念されたり、市町村合併や財政逼迫による行政サービスの低下を補うために地域が抱える課題の受け



皿として期待されている。

真鶴町では平成に入ってから自治会が合併・再編されている。つまり、私たちの身近な「生活の単位」は、政策的には合理化・広域化の流れのなかにあるといえる。

にもかかわらず、岩中央の人びとにとつて、もつとも身近な「生活の単位」は、自治会よりも小さな近隣組織である「となり組」なのであり、それがまちづくりの基盤となる組織なのであった。

そう考えると、当たり前のように聞こえるかもしれないが、人びとの「生活の単位」や「まちづくりの基盤となる組織」は地域によつて異なっていることを自覚しなければならぬだろう。

このことをあえて指摘する必要があるのは、行政は一律にその領域や単位を設定しがちであるからだ。もちろん小学校区が有効な場合もあるだろうが、「となり組」という自治会の下部組織に位置づけられ、思わず見逃されそうな近隣組織が機能する場合があることをこの事例は教えてくれている。

「地区防災計画」の策定過程が物語るように、まちづくり政策と、現場の人びとの「生活の単位」がずれてしまえば、その政策の有効性は落ちかねない。そして、いま



危惧されていることは、小学校区がさまざまな機能を一手に引き受けることによつて、これまで自治会が担ってきた役割が奪われ、近隣のつながりがむしろ断絶する恐れがあることだ。

岩中央の水道組合に注目することとみえてきたことは、人びともつとも身近な生活互助のしくみをきちんと把握することの大切さであつたといえよう。

研究のとりまとめに入った秋頃に、思いがけないうれしい知らせが届いた。夏の調査やこの連載記事を読んだ町民から水道組合の管理（掃除）を手伝いたいと申し出があつたのだ。

私たちは、このプロジェクトがスタートした2021年（令和3）から「人のつながりを生み出す水場（井戸端）」に着目して研究を進めてきたが、こうした現場の好転には勇気づけられる思いがする。

「移住者を溶け込ませる社会的仕掛け」

もうひとつの研究テーマは、「美の条例」制定から30年を経て、神奈川県唯一の「過疎地域」にもかかわらず、なぜ若い世代の移住に結びつくようになってきているのか

を問うものであった。2019年には町の人口が初めて社会増に転じた。

移住者数の急増に目を奪われがちになるが、私たちは、移住者が地域活動やまちづくりの中心的な役割を担っていることに注目した。

過疎地域の移住をめぐる政策的課題は、もはや移住者数の増加ではなく、移住者に地域に馴染んでもらい、地域活動やまちづくりの担い手となってもらうことだからである。

ではなぜ真鶴町では、移住者が地道な地域活動に加わり、まちづくりの担い手として活躍できているのだろうか。私たちは、真鶴という地域社会には、移住者が地域に溶け込めるような「社会的な仕掛け」が幾重にもちりばめられているのではないかと考え、真鶴固有の2つの仕掛けに焦点をあてた。

ひとつは、人間関係紹介の「まち歩き」である。移住者にまちを案内する「まち歩き」は一般的だが、真鶴では本質的にはその逆になっていることがおもしろいことだった。もちろん、形態としては、移住者に向けた「まち歩き」である。しかし、地元住民に出会うと、「移住を考えている〇〇さん」といった具合に、地元住民に移住者

1 悪天候にもかかわらず多くの人が参加した 2 「水チーム」発表者の西牧侑真さん 3 「水チーム」発表者の横井玲音さん 4 「移住者チーム」発表者の川俣美桜さん 5 「地元住民チーム」発表者の平山凜子さん 6 「地元住民チーム」発表者の山下友梨子さん 7 8 9 参加者に壇上から挨拶するゼミ生たち。右から「水チーム」「移住者チーム」「地元住民チーム」 10 当日はリモートで参加したミツカン若手社員たち



を紹介していく特徴をもっている。いわば、まちの人たちが主役で、移住者を地域に紹介するしくみになっているのだ。

このことが結果的に、地域が移住者を選ぶようなくみとなっていて注目されるよう。71号ではこれを真鶴の暮らしの根底にある「フィルター」として表現したが、これがある種の移住者選別機能を果たしているように感じられた。

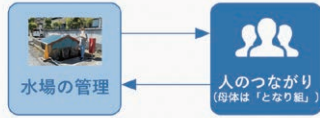
真鶴の暮らしぶりや濃密な人の付き合い方に適合する人だけが移住につながるようになっており、まち全体に一体感がある。

もうひとつは、移住者を支える「社会的オヤ」の存在である。真鶴という地域社会には、若者や移住者といった社会的に不安定な位置にある者を「社会的オヤ」が支える歴史的な性格を備えていることが浮き彫りになった。真鶴には、このしくみが潜在的にあり、移住者の急増のようなある条件のもとで立ちあらわれてくるものであった。



調査から得られたこと

① 水場が人のつながりをつくる



② 人びとのもっとも身近な「生活の単位」を捉え、政策にいかす

政策を打つとき…

行政側は一律に
地域を設定しがち

コミュニティ
政策は
小学校区

地域によって人びとの
「生活の単位」は異なる！

小学校区？
町内会？
となり組？

コミュニティ政策の動向



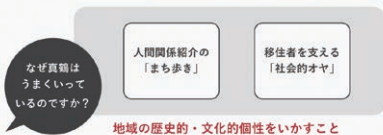
合併
町内会再編
…など

今回の知見



より小さな「生活の単位」をいかしたほうが有効性が高い

③ 移住・コミュニティ政策の成功モデルのカラクリを可視化
過疎地域への波及効果を！



野田さんとゼミ生たち。発表会を終えて表情が晴れやかに



発表会のあとに交流する参加した地元住民とゼミ生たち



「社会的オヤ」が授ける
地域で生きる術

もちろん、真鶴への移住ルートは人によって異なるし、これらの仕掛けが万能であるともいえないけれども、過疎化や担い手不足に悩む地域への政策的ヒントとなりうるものではないだろうか。

個人的に真鶴に通っていて驚いたことがある。それは真鶴駅前の一等地(福浦屋食堂の旧店舗)に移住者のケニーさんと向井研介さんが営む「真鶴ビザ食堂KENNY」が移転したことだった。

どの地域でも、まちの玄関口のような場所には地元住民であっても周囲から認められるような人物でなければ出店が難しいことを知っていたからである。

ケニーさんは福島県田村市出身で、東京のイタリア料理店での修行を経て、2016年(平成28)に夫妻で真鶴に移住された。当時は町役場の近所にお店をだされていたが、2020年(令和2)6月頃に現店舗に移転された。

ケニーさん夫妻は福浦屋食堂で食事した際に、「いつかこの場所が空いたらお店を開きたいね」と話すほど憧れた場所だった。

その後、福浦屋食堂は閉店。その立地から周りの飲食業の先輩たちも話題にするほどで、とても自分の出る幕はないと思っていた。

そこから半年ほど経ったある時、スーパードで食堂店主をみかけて思い切って声をかけた。すると店主は「店を閉めることにしたから、食器あげるよ。今度みにきなよ」と話し、店舗をみにいくことになった。そこで移転先を探していることを告げると、「君ならつかっていいよ」とこたえてくれたのだ。

なぜ店主は面識のなかった移住者に店舗を貸すことにしたのだろうか。

じつは店主は真鶴町商工会青年部の元部長だったのだ。「青年部で君ががんばっているの、周りに聞いているから」と話してくれたそう。

ケニーさんは、移住後すぐに商工会に加入し、青年部の副部長を務めている。商工会青年部は、真鶴のまちづくりを支える伝統ある地域団体のひとつである。

今回の調査では、ケニーさんが地道な地域活動に汗を流す姿はよく知られていて、真鶴の玄関口への出店にふさわしいと評価する声を聞いていた。ケニーさんは、福浦屋食堂の看板を店内にいまも掲

「真鶴ビザ食堂KENNY(ケニー)」を経営する向井研介さん(左)と妻の日香(にちか)さん(右)。研介さんの母親(中央)、日香さんの両親も真鶴に移住した





係は築くうえで、「社会的オヤ」が不可欠な存在であることを気づかせてくれたのではないだろうか。

私たちが地域で安定した人間関係を築くうえで、「社会的オヤ」が不可欠な存在であることを気づかせてくれたのではないだろうか。

係はなにも移住者に限ったものではない。私たちが地域で安定した人間関係を築くうえで、「社会的オヤ」が不可欠な存在であることを気づかせてくれたのではないだろうか。

いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「社会的オヤ」とは地域のルールや暮らしの作法、いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「社会的オヤ」とは地域のルールや暮らしの作法、いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「社会的オヤ」とは地域のルールや暮らしの作法、いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「社会的オヤ」とは地域のルールや暮らしの作法、いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「社会的オヤ」とは地域のルールや暮らしの作法、いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「社会的オヤ」とは地域のルールや暮らしの作法、いわば「地域で生きる術」を授けるような存在なのである。今回は、移住者を支える存在として、「社会的オヤ」を見いだした。しかし、本来の機能がそうであるように、この社会関係はなにも移住者に限ったものではない。

「真鶴」から波及効果を

真鶴町は全国に先駆けて「美の条例」を制定するなど、景観・まちづくり分野のトップランナーとして国や地方自治体の視察先として注目されてきた。

今後は移住者が地域に溶け込み、地域活動やまちづくりの担い手となった先進地としても、視察が増える予想される。その際には、本研究で可視化した2つの「社会的仕掛け」を成功モデルのヒントとして提示いただければと考えている。そうすれば、真鶴町から過疎地域への波及効果が期待できよう。

真鶴ではこれまで多くの優れた研究が蓄積されてきたが、私たちが描いてきた真鶴の姿はそれらとはまた異なるものであったであろう。このような研究が実現できたのは、^{ト部直也}ト部直也さんをはじめとする町役場の全面的なご支援と調査にご協力いただいた町民のみなさまのおかげである。私たちも町民のみなさまから「地域で生きる術」を学ばせていただきました。改めて感謝を申し上げます。

(2022年11月20日取材)



私たちが知らなかった真鶴の姿
真鶴町政策推進課 課長補佐 兼 戦略推進係長
ト部直也さん (当日の挨拶より抜粋)

野田先生、法政大学の学生の皆さん、ミツカン水の文化センターの皆さん、研究活動おつかれさまでした。皆さんが初めて来町したときはまだ桜が咲いていましたね。4日間滞在した夏合宿では、とにかく現場を歩いて人の話を聞いて持ち帰り、夕食を食べたあとも夜遅くまで討議して—皆さんががんばっていた姿を私は知っています。

当初、野田先生は「水と人のかかわり」という研究テーマで真鶴に来ましたと言われました。役場としては「真鶴と水？ 自己水源に乏しいのに……」と戸惑い、どのような研究ができるんだろうと思索したのが正直なところです。ところが、まったく想定していなかったような報告が今日なされたと感じています。

まず水に関しては、岩地区を中心に水が豊かだったこと、そして水に伴う人びとのつながりがあることを知りました。岩地区の自治会ががんばって地域を支えている姿を掘り起こし、最終的には「となり組」に着目した提言と受けとめています。自治会は政策推進課の担当ですし、この会場には自治会の方々もおられます。この提言を受けて、地域をどういう単位で考えればよいのか話し合っていきます。

また、「社会的オヤ」と「まち歩き」に着目した報告もいただきました。役場が推進する「くらしかる真鶴—真鶴町お試し移住体験事業」で取り組んだのが、まさに「人を紹介する」ことでした。真鶴出版はその利用者第一号です。「来てくれた人に真鶴の人を紹介しよう」と始めたことが、移住者へのよい支援になっていた。今後も、「地元の人を見て、つないでいくこと」を意識しながら取り組んでいきます。

「社会的オヤ」に関する報告を聞いて、20年前に移住してきた私自身にもオヤのような存在の人がいたからこそ今があることを思い出すと同時に、「役場職員の仕事への取り組み方」が問われているとも感じました。地域にはいろいろな人がいます。役場職員は自分の仕事に閉じこもることなく、日々の仕事のなかでどんな人が住んでいるのか、どんな思いで活動しているのかを知ったうえで応援し、つないでいくことが必要です。仕事だけでなくプライベートでも人とつながり、外から来た人に真鶴の人を紹介できる職員にならないといけない。そう身が引き締まる思いがしました。

今回の提言をきっかけに、私たちがもっともっと真鶴を深く知ることに繋がっていきたいと思います。

研究成果発表会における参加者のコメント

(質疑応答より一部抜粋)

- 学生さんたちを「岩地区の水」へ案内するために調べていると、水を一生懸命守っている人たちに出会いました。学生さんたちが見学すると、管理されている方が喜んで元気になり、さらに「お手伝いしたい」という方も現れたのです。皆さん来てくれてありがとう。
- 「となり組」の大切さで思い出しましたが、昭和40年代まで私の母は無尽講に参加し、毎月20人ほどで話をしていました。予期せぬ災害が起きたとき、頼りになるのは「向こう三軒両隣」。互助の精神で助け合うためにも、ふだんのコミュニケーションを大事にしたいです。
- 「相模湾が見える町へ」とあまり考えず真鶴へ移住しましたが、友人から「いいところに決めたね!」と続々と連絡が。「真鶴出版には通うべき」「KENNYのビザはおいしいよ」と。今日参加して、真鶴は人のつながりが深く、魅力的なまちだということを理解しました。
- 今、真鶴の空き家を待っている人は110人以上いらっしやいます。時折売却物件が出るとうれしいお問合わせが集中するような状況です。観光に来てそのまま空き家バンクの利用登録をする方もいます。それくらい多くの人が真鶴に興味をもっているのです。
- 移住してきた私は「地元の方々に真鶴をもっと好きになってほしい」と自治会だよりをつくっています。お話を聞いて記事を書くことと反響が大きいです。学生の皆さん、ぜひ真鶴への移住を検討してください。ここにいる人たちみんなが、皆さんの「社会的オヤ」になりますよ。

研究の苦しみを乗り越えたゼミ生たちと若手社員 (編集部)

初めて真鶴町を訪ねたのは2022年4月。前年度(松本市)とは異なり、ゼミ生たちは何度も真鶴を訪ね聞き取り調査を重ねます。ゼミ合宿後は各グループが思考を深め、いよいよ発表会当日。やや緊張した面持ちで会場入りしたゼミ生たちですが、落ち着いて報告できました。調査でお世話になった住民の方々や談笑する時間は、真鶴から離れた気持をより一層強めた

ようです。成果発表の詳細、「辛かったけれど振り返ると楽しかった」「真鶴の人たちはほんとうに魅力的」など研究活動を終えたゼミ生たちと若手社員のコメントは2月末にセンターのHPで公開します。「みず・ひと・まちの未来モデル」3年目の地域や研究テーマなどは野田さんと相談中です。ご期待ください。

ミツカン水の文化センター セミナー

木で作られた水道管

江戸時代のインフラを支えた上水道のかたちを 開催しました！

2022年(令和4)11月23日、セミナー「木で作られた水道管～江戸時代のインフラを支えた上水道のかたち～」を開催しました。

講師は、東京都水道歴史館 企画調査責任者の金子智さんと、東京都埋蔵文化財センター 主任調査研究員の鈴木伸哉さんです。お二人には、2022年春にミツカングループが所蔵する愛知県半田市のミツカン本社敷地で出土した江戸時代の木樋(木で作られた水道管)の調査・分析と当時の史料の解説をお願いしました。

セミナーは、その結果も含め、金子さんと鈴木さんの研究フィールドである近世都市・江戸の水道「江戸上水」と半田に敷設された水道「半田水道」を比較し、当時の木製水道管「木樋」についてお話しいただきました。会場では実際に出土・保管されている木樋も展示しました。

実施報告はHPで公開中です。ぜひご覧ください！



悪天候にもかかわらず、多くの方が参加した



セミナー会場に展示された江戸の水道管(右:東京都水道歴史館蔵)と半田の水道管(左:ミツカングループ蔵)



金子 智さん
東京都水道歴史館
企画調査責任者



鈴木伸哉さん
東京都埋蔵文化財センター
主任調査研究員

日時：2022年11月23日(水・祝)
13:00～15:00

会場：ベルサール九段
(東京都千代田区)
オンライン
(Zoomウェビナーにて配信)

参加者数：106名
(会場46名/オンライン60名)

主催：ミツカン水の文化センター
共催：一般財団法人 招鶴亭文庫

研究紹介

「あまみずドリンク」で雨水の活用を

60号の特集「水の守人」で雨水生活の研究について取材させていただいた福井工業大学教授の笠井利浩さん。今も五島列島の赤島での研究活動を続けつつ、「雨水の水資源としての可能性をより広く知っていただきたい」(笠井さん)として、雨水を用いた「あまみずドリンク」の試作と普及にも取り組んでいます。

「あまみずドリンク」は、福井工業大学の敷地内に降り注いだ雨を集めて製造したもので、「あまみずウォーター」「あまみずサイダー」「あまみずソーダ」の3種があります。

「この社会の活動を支える淡水資源の源は『あまみず』です。それを再認識するため、参加型プロジェクト『あまみず飲料化プロジェクト2022 for SDGs』を立ち上げました」と言う笠井さん。興味のある方は下記までご連絡ください。



雨水を用いた「あまみずドリンク」3種

「あまみずドリンク」
メイキングムービーはこちらから



福井工業大学地域連携研究推進センター
Tel : 0776-29-7834 / E-mail : futccrc@fukui-ut.ac.jp

訪問

再訪！ 岩首昇竜棚田(佐渡)



初冬の岩首昇竜棚田と大石惣一郎さん

写真家の梶井照陰さん取材(pp.19-23)のため、4年ぶりに佐渡へ渡った編集部は、61号の特集「水が語る佐渡」でお世話になった岩首談議所の大石惣一郎さんを訪ねました。

「照陰さんは私たちのイベントをよく手伝いに来てくれるんですよ」と大石さん。岩首昇竜棚田を案内していただきました。

拠点としていた旧岩首小学校の校舎が解体される方向のため、春以降は空き家を拠点とする予定の岩首談議所は、棚田の保存や交流事業の受け入れ、お米の販売、棚田トラストの募集などさまざまな事業を進めながら、これからも集落と島全体の活性化に取り組むそうです。

【お知らせ】 連載「水の文化書誌」と「Go! Go! 109水系」は諸事情により休載いたします。次号をお楽しみに！

ポストカードと書籍をプレゼント!

特集で取材させていただいた方や施設の絵葉書と書籍を抽選で9名の読者に差し上げます。右の「73号アンケート」にWebから回答のうえ、ご応募ください。なお、応募期限は2023年3月31日(金)とさせていただきます。



皆さまからの感想、
情報をお待ちしています!

『水の文化』73号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://forms.office.com/r/xbbvJEsmd7>

アンケート用紙をお持ちの方は
下記へご返信ください。

FAX: 03 (6784) 3056

編集後記

「芸術を語るなんておこがましい。」そんな風に自分自身を決めつけ、それらといつのまにか距離を取ってきていました。しかし、今号の取材を通じ、観て聴いたことに、何度も心が跳ねた自分がいました。芸術における水の多様性の片鱗に触れたことを好機として、表現者が魂を込めて形にされたものにもっと気楽に触れていき、刺激を得ながら、人生の視野を広げていきたいと思えます。(ネ)

大小島さんの生と死の循環のお話を伺いながら、自分は同じ感覚を覚えながらも、その壮大さに怖気づいて考えることから逃げてしまったことを思い出した。芸術家は逃げずにそれを突き詰めて考え、作品として表現している方。そう考えると、尊敬の気持ちで一杯になった。芸術家に敬意を払い、1人の人間として何を感じるか、芸術作品を通じて自分の心とじっくり向き合いたいと思う。(松)

久しぶりに絵の具でお絵描きをしました。子どもの発想の自由さに感動。「これは、海。夜だから黒い青でしょ。でも黄色もぬりたいから、はんぶん朝ね。」どうやって半分にするのか黙って見ていると、青空に黄色い太陽! 海には色とりどりの魚たち。彼女なりの表現で、一枚の画用紙に朝と夜が出来上がっていく。芸術って自由だ。目の前の小さな表現者に改めて教えられた気がする。(飯)

近所の大通りの両脇に、鮮やかな赤と青の大きな「手」の彫刻がある。手のひらは笑った「顔」になっていて、当時小学生の私に強烈な印象を残した。後に岡本太郎の作品だと知った。その入り口となる商店街に活気が戻ることを願って設置されたい。思えばこの奇抜な彫刻を、深く考えず素直に受け止めた。その商店街を意識する「きっかけ」になり、アートと聞いて真っ先に思い浮かぶ作品だ。(力)

セノテに潜るシーンが鮮烈で夢が現かわからなくなり呼吸すら忘れた。そんな体験もした今回の特集。当初、「水」を切り口に話を聞くのはやや強引かと案じたのは杞憂に終わり、表現や作品に込めた思いを聞くことができた。「わからないから描くし、描きながら考えている」という大小島真木さんの言葉に芸術の根っこを見た思いがすると同時に、「水の文化」もそうあらねばと思った。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌
水の文化 第73号

ホームページアドレス

<https://www.mizukn.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2023年(令和5年)2月初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学教授

制作

今村浩二

松本裕佳

鈴木彩乃

青木広実

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.24-25, pp.28-35)

手塚ひとみ (pp.14-18)

開 洋美 (pp.19-23, pp.40-41)

前川太一郎 (pp.10-13, pp.26-27)

撮影

大平正美 (p.13, pp.24-27, pp.40-41)

川本聖哉 (pp.4-5, pp.14-18, p.30)

藤牧徹也 (pp.28-30, pp.42-47)

渡邊まり子 (pp.22-23)

印刷

中塾総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター



表紙:2022年10月13日から
12月25日、千葉市美術館で
開かれた「つくりかけラボ09
大小島真木 | コレスポンダンス」
でインスタレーションを制作する
現代美術家の大小島真木さん
撮影:川本聖哉

(上)グラスの縁をこすって振動を与え、音を奏でるグラスハーブ。国内唯一のプロ奏者、大橋エリさんが指を滑らせると、調律のために入れた水に波紋が生まれた
撮影:大平正美
(下)隣地から移植した318本の落葉樹、溪流の水を引き込んだ160の池が広がるアートビオトープ「水庭」。四季を通じてさまざまな表情を見せるアートのスポット
撮影:藤牧徹也

